



赤毛のアン
ヨセフの真実

目次

序章

～ようこそドロの世界へ～	2
--------------	---

第1章 シャーロット・ブロンテマニア

第1節 『赤毛のアン』とブロンテ作品の符合	4
第2節 黒髪のパア	6
第3節 「思い出」の花	7
第4節 『赤毛のアン』とシャーロットの年譜の符合	9

第2章 アン・シリーズの時間軸（タイムライン）

第1節 アンとマシュウの生まれ年	14
第2節 時間軸の初期設定	15
第3節 アン・シャーリーの誕生日	19

第3章 Anne's House ofRomance

第1節 ボーリングブローク	24
第2節 スコットランドへの忠誠	25

第4章 原郷の地

第1節 アヴォンリーは古メルローズ	30
第2節 マシュウとマリラの由来	31
第3節 川と森の重なり合うイメージ	35

第5章 白バラのヴィジョン

第1節 マシュウのスコッチローズ	40
第2節 アルピオンの馬の記憶	41
第3節 ノーサンブリア王国	43

第6章 青春の光と影

第1節 ポリーという愛称	48
第2節 『アンの青春』を彩るシャーロット・ブロンテ	50
第3節 投影された22歳の死別体験	52

第7章 シャーロット・ブロンテの恋文

第1節 「島」を離れて運命の人を知る	58
--------------------	----

第2節	アンとギルバートとフィリパ	59
第3節	ジェムシーナ伯母さんとジャコバイト	61
第8章	1891年の夏の夢	
第1節	振られた三人男、おじいさんになる	66
第2節	夢の家の在りか	67
第3節	船長と教授	69
第4節	ヴィジョンが見える人	70
第5節	kindredspirits とヨセフを知っている一族	72
第6節	ウィルが「盗んだ」指輪	75
第9章	操作された時間軸（タイムライン）	
第1節	スペイン風邪がさせた決心	80
第2節	『アンと幸福』で失われたもの	81
第10章	それでも見つけてほしいもの	
第1節	Willow と Will	90
第2節	三年間の幸福	92
第3節	二人のキャサリンと「6月28日」	93
第11章	最後の二作で叶えたもの	
第1節	夭折した二人のブロンテ姉妹	98
第2節	Lucy という名の系譜	100
第3節	早世した魂の救済	103
最終章	モンゴメリの死と再生	
第1節	ヨセフは「取り去られた者」	106
第2節	DOR の物語	107
補章	その1	
	アヴォンリーは創造的アナグラム	112
補章	その2	
	アン・ブロンテの没年齢	116
補章	その3	
	ネルソンとマクニール、そして「マリラ」	122

序章

～ようこそドロの世界へ～

1942年4月24日。

『赤毛のアン』の著者、L. M. モンゴメリは67歳で亡くなりました。

その死因については近年、モンゴメリの次男から連なる近親者から「過剰服薬による自殺」だったと告白されています。

最晩年には視力も衰え、手の痛みから文字が書きにくくなっていたことや、まだ終息の見えない第二次世界大戦の渦中であったこと、夫の精神の病が悪化したこと、そして長男の度重なる不祥事に悩まされていたことなどなど、モンゴメリが死に至った理由はさまざまに憶測されています。

私には、なぜモンゴメリが死を選んだのか、そもそも本当に自殺であったのかもわかりません。

けれども、彼女が残したアン・シリーズや日記を丹念に読み解くにつれて、彼女の心の軌跡が浮かび上がってきました。

その軌跡をこれからお示ししたいと思うのですが、厄介なことにそれは大変込み入っています。

もしかすると「ドゥリィー (dree: 退屈)」で「ドゥリィアリィ (dreary: うら寂しい)」な試みだと思われるかもしれませんが、読み終えたときに広がる『赤毛のアン』の新たな風景を楽しみに、ケルト世界のドロの沼にハマった気持ちで最後までお付き合いください。

遠い日本まで、そして時代を超えて私たちに届けられたアン・シリーズと、そこに描き出されたキンドレッド・スピリッツ “Kindred Spirits” という魅惑的なワード。

村岡花子さんによって「同類」と訳出されたこのキンドレッド・スピリッツがどこから来たものであるのか、『赤毛のアン』の創作の源に迫りたいと思います。

第1章 シャーロット・ブロンテマニア

第1節 『赤毛のアン』とブロンテ作品の符合

モンゴメリはかなりのブロンテ マニアでした。

そのことは、『ブロンテになりたかったモンゴメリ』で示した通り、“Anne of Green Gables”（邦題『赤毛のアン』）とブロンテ姉妹の作品それぞれの登場人物の間に見られる数々の符合から知ることができます。

例えば次のようなものが挙げられます。

【二人のシャーリー】

Shirley Keeldar（シャーリー・キールダー）：シャーロット・ブロンテの作品『シャーリー』の主人公。男の子が生まれるとの期待の中で生まれた女の子。

Anne Shirley（アン・シャーリー）：モンゴメリの作品『赤毛のアン』の主人公。働き手として男の子を引き取ったはずの初老の兄妹のもとに、手違いで引き取られた女の子。どちらも男の子の「代わり」の女の子という設定であり、顔色は良くないけれど知的で表情豊かな顔立ちと、夢見心地になりがちでしばしば白昼夢に耽る想像力の持ち主というところも共通しています。

【二人のギルバート】

Gilbert Markham（ギルバート・マーカム）：アン・ブロンテの作品『ワイルドフェル・ホールの住人』の語り手であり、主人公の再婚相手。

Gilbert Blythe（ギルバート・ブライス）：モンゴメリの作品『赤毛のアン』の主人公がのちに結婚する男性。

二人とも、ヒロインに向けて芽生えた恋心を無残にも蕾“bud”のうちに摘み取られてしまうという苦悩を抱えています。

【二人のブライス】

David Bryce（デイヴィッド・ブライス）：シャーロット・ブロンテに求婚して振られた2人目の男性。23歳のシャーロットにプロポーズして振られ、六か月後に、血管破裂で死去。

Gilbert **Blythe** (ギルバート・ブライス) : モンゴメリの作品『赤毛のアン』の主人公がのちに結婚する男性。22歳のアン・シャーリーに振られた後に、病気になって死の淵をさまよう。

どちらも「活発」「ハンサム」「機知に富む」「才気ある」人物。

(なお『アンの夢の家』には、ギルバートの大伯父としてデイヴィッド・ブライス “David Blythe” という人物が登場しますが、詳細は第8章に記載。)

【二人のダイアナ】

Diana Rivers (ダイアナ・リバーズ) : シャーロット・ブロンテの出世作『ジェイン・エア』の登場人物。主人公・ジェインが親しみを感じた女性で、じつは「いとこ同士」すなわち「血族関係 = kindred」。

Diana Barry (ダイアナ・バーリー) : モンゴメリの作品『赤毛のアン』の主人公・アンが、「同類」“Kindred spirits”を感じる腹心の友。

リバーズの「リ」と「バ」を reverse (逆転) させるとバーリーになっているところは、ユーモアの才気あるモンゴメリならではのと言えるでしょう。

さらに「バーリー」に注目すると、『ピーターパン』を描いた James Matthew Barrie (ジェイムズ・マシュー・バリー) にも因んでいると思われます。

余談ですが、モンゴメリは新婚旅行で英国を巡った際に、この作家の生まれた町、スコットランド・フォーファーシャーのキリミューを訪ねているほどですから、『アンの夢の家』の中で「わたしの知っている人たちのいちばん立派な二人の紳士の名前」すなわちジム船長やマシュウ・クスパートに因っているとアンに語らせている、アンの長男ジェムのジェイムズ・マシュウという名前もジェイムズ・マシュー・バリーと無関係ではないでしょう。

【二人のマシュウ】

Matthewson Helston (マシューソン・ヘルストン) : シャーロット・ブロンテの作品『シャーリー』の二人の主人公のひとりキャロラインの叔父であり養父。

Matthew Cuthbert (マシュウ・クスパート) : モンゴメリの作品『赤毛のアン』の主人公・アンを引き取り、妹マリラとともに育てる。

二人とも主人公の養父という点で共通している。

【二人のレイチェル】

Rachel (レイチェル) : アン・ブロンテの作品『ワイルドフェル・ホールに住人』の中に登場する年配のメイド。

Rachel Lynde (レイチェル・リンド) : モンゴメリの作品『赤毛のアン』に登場する婦人。どちらも世話好きの年配の女性であり、メイドのレイチェルは物語の中でしばしば館の

ドアを開けて客人を招き入れ、リンド夫人は最初の登場人物として物語の扉を開き、私
たちを『赤毛のアン』の世界へと招き入れます。

第2節 黒髪のパア

さて、モンゴメリはアンの最初の“kindred spirits”であるダイアナ・バーリーを、シャー
ロット・ブロンテが描いたダイアナ・リバーズから持ってきていたことは前節に書いた
通りです。

ともに主人公から「ダイ」と呼ばれているダイアナは、どちらも黒髪の持ち主。

実はもう一組の黒髪のパアがいます。

それは、『赤毛のアン』のマリラ・クスバートとシャーロット・ブロンテの『シャーリー』
のオルタンス・ムア。

50代後半のマリラと違って、オルタンスはまだ30代半ばの女性です。

「彼女はムア氏より少し年上に見えた。おそらく三十五ぐらいで、背が高く【中略】髪は
真黒で【中略】気難しいが悪気はなさそうな顔付き」 5章より

「いつも息を切らして忙しくしているマドモアゼルは、今日も台所から居間へとせわしく
動き回って半日をつぶしていた—【中略】こうした課題を完全にはたしても、オルタン
スは決して褒めない。【中略】課題に誤りが見つからぬときには、生徒の立ち居振る舞い
なり、態度なり、服装なり、様子なりを正さなければならないことになったのである。」

6章より

「もっと堅実で、地味なものの方が「ずっと礼儀にかなっている」はずだと思ったのだ。」

6章より

「黒い髪も、その下の多少独断的で強情そうには見えるが、実は情深い顔も【中略】オル
タンスは温かさよりも威厳のまさった顔で以前の教え子を迎えた。」 17章より

こうしたオルタンスの特徴は、

「マリラは背の高い、やせた女で、丸みのない角ばった体つきをしており白髪の見えはじ
めた黒い髪をいつも後ろで、かたくひつつめにして、二本のかねのピンでぐさっととめ
ていた。」 1章より

「マッシュウ、だれかがあの子をひきとってものごとを教えてやらなけりやなりませんよ。
まったくあの子は異教徒と紙一重なんですからね。【中略】きっとあの子のしつけがわた

しの手いっぱいの仕事になっちまうにきまっていますよ。」 7章より
「どうしてマリラはいつもアンにあんなにかざりけのない、地味なかつこうをさせておく
のだろう？【中略】あんなみじめななりをさせて、それでアンに、へりくだりの気持を
持たせようとするつもりらしいが」 25章より
「一方マリラの方は猛烈な勢力を出して手当たりしだいに仕事をやり出し、一日じゅうた
ち働いていたが、ともすれば涙が流れだして、どうにもならないせつない思いがやきつ
くように胸をかんでいた」 34章より

という『赤毛のアン』のマリラを彷彿とさせます。

Hortense (オルタンス) は、ラテン語 Hortensia のフランス語形で、意味は garden (花園)。
一方、Marilla (マリラ) はケルト語で「輝く海」というのが今では定説ですが、私はそ
の意味と共に、別のニュアンスを感じています。

第3節 「思い出」の花

私が Marilla (マリラ) に感じる別のニュアンス、それは「私のライラック “Lilac”」。
ライラックは春から初夏にかけて花が見頃となる木で、フランス名は Lila (リラ)。
『ライラックの木かげ』をはじめとして、モンゴメリの愛読書だったルイーザ・メイ・オ
ルコットやシャーロット・ブロンテの作品にも描かれており、ハウースのブロンテ家
が住んでいた牧師館の庭には「ライラックの低木」があったことが知られています。
モンゴメリがアン・シリーズの中で描いた「ライラック」を執筆順にまとめてみましょう。

『赤毛のアン』：3回

(4章) グリーン・ゲイブルスの下手の garden から「紫色の花をつけたライラックのむせ
るような甘い匂いが」

(5章) アンの想像の中の生家の「前の庭にはライラックが植わって」いる。

(12章) 薄紫色の石鹸 (サボン) 草の「薄紫色」が Lilac。

『アンの青春』：1回

(18章) トーリー街道の冒険にてダイアナが渡してくれた包装紙の裏にアンが綴ったス
ケッチ「(アンの garden の) ライラックのしげみの中のカナリア」(カッコ内は筆者補足)

『アンの愛情』：2回

(21章) アンの生家での描写「門のそばにはほんとうにライラックの木があるわ。」

(35章) アンがかつてトーリー街道の冒険時に書いた「しおんとスイートピー、ライラックの花々の茂みにとまる野生のカナリヤと、花園を守護する天使とのあいだの短い問答体」のスケッチを読み返す。

『アンの夢の家』：無し

『虹の谷のアン』：1回

(29章) garden に植えられたライラックについて

『アンの娘リラ』：1回

(最終章 35章)「虹の谷は夕日の素晴らしい薄紫色の光を浴びてよこたわっている」の「薄紫色」が Lilac。35章のタイトルは”RILLA-MY-RILLA!”

『アンの幸福』：3回

(第一年目 13章)「ライラックの茂みの中」

(同 14章)「ライラックの茂み」

(第二年目 11章)「窓の下から漂ってくるライラックの香」

『炬辺荘のアン』：3回

全て(2章)ヘスター・グレイの庭の「ライラックの木」、「ライラックの匂い」、「ギルバートはライラックが大好きなの。」

その後の章では、ライラックの花が咲く季節の終わり(7月末)にリラ・ブライスが誕生。

『アンの青春』のなかで、アンがトーリー街道の冒険を記した文章にはライラックが描かれています。そのスケッチは原文では“garden idyl (花園牧歌)”と呼ばれており、次の作品『アンの愛情』では、大学の卒業試験の勉強中に“garden idyl”の原稿を見つけたアンが読み耽ります。

アンの想像した生家と実際の生家、そしてヘスター・グレイの庭にも、アンの思い出の庭には必ずライラックが描かれていて、“**garden**”(オルタンス)と対で用いられていることがわかります。

そして、ライラックの花言葉は「思い出」。

ブロンテ姉妹が生きたヴィクトリア女王の時代には、

「ヴィクトリア朝時代には、花をはじめとする植物に象徴的な意味を持たせる伝統が確立しており、当時の人々は花言葉をよく使った」『ブロンテ姉妹の抽斗』デボラ・ラッツ著
松尾恭子訳 柏書房 2017年発行

そうですから、シャーロット・ブロンテを投影して『赤毛のアン』を描き始めたモンゴメリは、アンの育ての母のネーミングを決める際には、きっと花言葉由来の意味を込めたはずで

す。2歳になる前に母を亡くしてから母方の祖父母に育てられたモンゴメリにとって、母の思い出は「育ての母」である祖母の思い出であり、祖母をモデルとしてアンの養母を描いたことをマリラという名前

で暗示したに違いありません。モンゴメリは後に、『アンの娘リラ』でアンとギルバートの間に生まれた女の子に、アンの生みの母バーサと育ての母マリラの名前を合わせて与えています。

そして、アンの次男坊ウォルターがその子に付けた愛称は「リラ・マイ・リラ（リラ私のリラ）」。

つまり「マリラ」はマイ・リラ、まさに「私のライラック＝思い出」なのです。

マリラのネーミングについては、さらに沼深い考察を補章その3で行なっていますので、そちらもどうぞご覧ください。

第4節 『赤毛のアン』とシャーロットの年譜の符合

2008年に出版百周年を迎えた『赤毛のアン』は、1905年に執筆が始まっています。

そのことは、モンゴメリが亡くなる三年前まで書き続けた日記から知ることができます。いつにも増して長い文章が綴られている1907年8月16日の日記から抜粋してみましょう。

“I have always kept a notebook in which I jotted down, as they occurred to me, ideas for plots, incidents, characters and descriptions. Two years ago in the spring of 1905 I was looking over this notebook in search of some suitable idea for a short serial I wanted

to write for a certain Sunday School paper and I found a faded entry written ten years before.”

“I began the actual writing of it one evening in May and wrote most of it in the evenings after my regular work was done, through that summer and autumn, finishing it, I think, sometime in January 1906.”

ここには、

*プロットのアイディア、出来事、キャラクター像について、思いついた時にすぐに書き付けられるノートを常に携帯している

* 1905年の春にそのノートを見返していたとき、10年前に書き込んでもう消えかかっている書き込みを見つけた

* 『赤毛のアン』を実際に執筆し始めたのは1905年5月の夕べ、書き終わったのは1906年の1月

ということが記されています。

なおモンゴメリは、1917年の雑誌連載で執筆した自伝的エッセイの中では、1904年春に書き始めて1905年10月に脱稿としています。

日記の記録よりも1年前倒しとなっているのです。

この謎については後ほど改めて第9章2節で触れますが、まずは日記の日付を正しいものとして、モンゴメリの年譜を整理していきましょう。

モンゴメリの日記から、「1905年の10年前＝1895年の書き込み」が『赤毛のアン』の原点となったことがわかります。

そして1905年の5月から『赤毛のアン』を執筆し始め、1906年の1月に原稿を書き上げると、様々な出版社に送付してみたものの、ことごとく拒絶され、とうとうその原稿を古い帽子箱にしまいこんでしまいます。

しかし、1906年の冬に読み返したら面白かったので、今度はページ社という出版社に送付してみたところ、

「(1907年の)4月15日に出版受諾の手紙が届いた」(カッコ内拙補足)

ことが、やはり1907年8月16日の日記に書かれています。

シャーロット・ブロンテの出世作『ジェイン・エア』が出版された1847年からちょうど60年目には間に合わなかったとはいえ、その区切りの年にブロンテへのオマージュを散りばめた処女作出版の目処がついたというシンクロシティは、彼女を大いに喜ばせたことでしょう。

そしてまた、ブロンテマニアであるモンゴメリが、『赤毛のアン』の構想の元となった書き込みを携帯ノートに記したという年についても、シャーロット・ブロンテが妹のエミ

リーとアンを説得してペンネームを決め、これまで書き溜めていた3人の詩集の出版に動き出した1845年の50年後であった、というシンクロニシティが起きていたというストーリーを創作したとしても不思議ではありません。

もちろん、『赤毛のアン』の原点となるアイデア・ノートを書き込みが書かれたのは、本当に「1905年の10年前＝1895年」だったかも知れませんし、単に切りの良い期間として10年としたのかも知れません。

しかし、シャーロット・ブロンテが亡くなった1855年から50年後の「1905年」に『赤毛のアン』の執筆を始めた、ということにはモンゴメリの明確な意思が込められていたはずであり、この事を記した日記の日付「8月16日」からも彼女の意思が読み取れるのです。

第2章 アン・シリーズの時間軸（タイムライン）

第1節 アンとマシュウの生まれ年

1905年1月2日。

モンゴメリは日記にこう綴っています。

“It is a dreadful thing to lose one’s mother in childhood! I know that from bitter experience.”（拙訳：幼少期に母親を失うことは、恐ろしいことだ。私は苦い経験からそのことを知っている。）

この記述は『赤毛のアン』の主人公の人物設定を伺わせるものですが、そこには1歳9ヶ月で母親を亡くしたモンゴメリ自身の経験はもとより、同様の経験を共有しているブロンテ姉妹の心象世界をも投影しようという着想が滲んで見えます。

『ブロンテになりたかったモンゴメリ』で示した通り、モンゴメリはアン・シャーリーの誕生月3月を、シャーロット・ブロンテの命日である3月31日から持ってきています。これは、靈魂再生説に心惹かれていたモンゴメリが、家庭を築いていく喜びから一転して、永遠の別れという悲しみの淵へと突き落とされたシャーロットの魂を、アン・シャーリーの物語で再生させようとしたことの現れでしょう。

そうであるならば、アンの生まれた年も同様にシャーロットに因んでいるはずです。

『アンの娘リラ』の物語に描かれている世界史的出来事を手がかりに、アン・シャーリーの人生の時間軸（タイムライン）を辿っていくと、アンは1866年の生まれであることが導き出されます。

この年はまさに、シャーロットの生年である1816年の50年後なのです。

さらにモンゴメリが『赤毛のアン』という物語が生まれた年、すなわち自身が『赤毛のアン』の執筆を始めた年は1905年だったということを、1907年の「8月16日」の日記で書いたのも、シャーロットの生まれ年「1816年」の「8」と「16」に符合する日を選んだからでしょう。

さて、アンは11歳の6月にグリーン・ゲイブルズに貰われて来ますので、

1866 年 + 11 歳 = 1877 年から『赤毛のアン』はスタート

ということになります。

また、アンをグリーン・ゲイブルズに連れてきたマシュウ・クスバートの年齢は、「六十歳の今」（『赤毛のアン』2章）とありますから、マシュウの生まれた年は1817年となります。

1877 年 - 60 歳 = 1817 年：マシュウ・クスバートの生まれ年

実はこの1817年は、シャーロット・ブロンテの弟パトリック・ブランウェル・ブロンテという人物の誕生年なのです。

第2節 時間軸の初期設定

モンゴメリはアン・シリーズの全体を通して、そこに描かれたエピソードがいつ起きたのかを年月日によって示すことも、現実の出来事とのリンクがはっきりとわかるように描くこともほとんどしていません。

つまり、時間軸（タイムライン）の設定が不明瞭なのです。

しかし、ある特別なエピソードを手がかりにすることで、アン・シリーズのタイムライン設定を読み解くことができます。

それは「サラエボ事件」です。

1921年に出版された『アンの娘リラ』は、

「新報の第一面には大きく黒い見出しでファーディナンド大公とかだれとかがサラジェボという気味の悪い名前の場所で暗殺されたと書いてあった。」 村岡花子訳 1章より

という件（くだり）から始まる、第一次世界大戦の勃発から終戦後までの時代を舞台とする物語です。

ここに書かれたファーディナンド大公暗殺とは、世界史的史実であるサラエボ事件のことですから、1914年6月28日日曜日の出来事を報じている記事だとわかります。

『アンの娘リラ』の1章には、リラが「あとひと月」で「十五」歳になることや、ジェムが「二十一歳」であると記述されており、物語の冒頭に1914年6月28日に発生したサラエボ事件が置かれていることから、リラは1899年生まれであること、ジェムは1893年生まれであることがわかります。

1914年－15歳＝1899年：アンの末娘リラの生まれ年

1914年－21歳＝1893年：アンの長男ジェムの生まれ年

6章はその同じ年の8月ですが、ジェムが出征することになり、その前の晩にアンが

「スーザン、私は今日、あの子がいつか私を求めて泣いた晩のことを考えているのよ。まだ生まれて数ヶ月しか経っていなかったわ。【中略】もしも二十一年前のあの晩、あの子が私を求めて泣いた時、行って抱いてやらなかったなら、私はとても明日の朝を迎えることができなかつたでしょうよ。」

と言っているセリフからも、ジェムが1914年8月には21歳であることが確認できます。一方『虹の谷のアン』の3章には、“thought thirteen-year-old Jem.”とハイフンで繋げた表記で、じきにティーンエイジャーになるのにまだ子供扱いされることを嫌がるジェムの描写があります。

つまり、1893年に生まれたジェムが13歳になる年＝1906年が、『虹の谷のアン』の物語が始まる年ということになります。

1893年＋13歳＝1906年から『虹の谷のアン』はスタート

そして、そこで描かれている草木の生育の様子から、この3章は5月下旬ごろのことと分かるので、彼の誕生日は5月下旬から1～2ヶ月の間であると推測されます。

さらに『アンの夢の家』19章では、アンとギルバートの最初の子ですぐに亡くなるジョイスが、“In early June”にマリラが手伝いに来てから程なく生まれたとしたうえで、34章でジェムが生まれたときにアンが、ジョイスが生きていたら満一歳を越えていると言っていることから、ジェムはおそらく6月下旬から7月の間に生まれていると考えられます。

『アンの娘リラ』の1章でも、1914年6月28日のサラエボ事件を報ずる新聞を読みながらのアンや家政婦スーザンとの会話の中で、Miss コーネリアが「ジェムは二十一だし」と言っていることから、6月28日前後には21歳になっていることがわかります。

さてここからは、このジェムの誕生日である1893年を軸として、アン・シリーズの時間

軸（タイムライン）を遡ります。

『アンの夢の家』ではジェムの誕生はアンの結婚から2年後と置かれているので、アンとギルバートの結婚は1891年であることがわかります。

ジェムの誕生 1893年 - 2年 = 1891年：アンとギルバートの結婚式が挙げられた年

『アンの夢の家』の2章では、9月に結婚式を挙げるアンは25歳と書かれているので、

アンの結婚 1891年 - 25歳 = 1866年：アン・シャーリーの生まれ年

ということになります。

こうして導き出された主人公の生まれた年をもとに『赤毛のアン』の物語を振り返ると、前述の通り

1866年 + 11歳 = 1877年：アンがグリーン・ゲイブルスに来た年

1877年 - 60歳 = 1817年：マシュウ・クスバートの生まれ年

ということがわかるのです。

では、マリラの誕生年はいつなのでしょう。

マリラは『虹の谷のアン』の2章で85歳と記述されています。

2章はジェムが13歳になる少し前、1906年の5月下旬のことですから、マリラの誕生日がこの時期よりも前なら彼女の生まれた年は、

1906年 - 85歳 = 1821年

となりますが、この時期よりも後に誕生日を迎えたとしたら1906年のうちに86歳になるので、

1906年 - 86歳 = 1820年

がマリラの生まれた年となります。

マリラの誕生年が1920年だとすれば、現在公表されているアン・ブロンテの誕生年と同じです。

ところが、マリラの生まれた年は1920年で確定かといえば、そうではないのです。

実は、アン・ブロンテの墓碑銘は二つあり、それぞれの書かれ方が異なっています。

ハウスにある壁銘板の碑銘に彫られた享年から考えられる満年齢が28歳であるのに対

して、アンが没した地スカーバラに建てられた墓碑に彫られた享年から考えられる満年齢は29歳となっているのです。

これについては補章その2で考察しますが、いずれにせよモンゴメリはギヤスケルの著作物に写し取られたハウースの碑銘から推察されるアン・ブロンテの死亡時の満年齢28歳（この場合の誕生年は1921年）と、後年の研究からわかったアン・ブロンテの誕生年1920年のどちらでも良いように、マリラの年齢を置いたのでしょう。

やはりモンゴメリは、マリラの誕生年もブロンテに因んだ年に設定していた様です。

先にマシュウの生まれ年が1817年と記しましたが、その年はブロンテ姉妹の肖像画を世に残したブロンテ家の長男パトリック・ブランウエル・ブロンテの誕生年と一致していることは既にご紹介しました。

つまり、マリラとマシュウのクスパート兄妹が、アン・ブロンテとブランウエルの兄妹に生誕年で重ねられていたことが推察されます。

アン・シャーリーの生まれ年がシャーロット・ブロンテの誕生年である1816年から50年後の1866年に設定されていることと考え合わせても、これは単なる偶然の一致ではないでしょう。

こうなると、そもそも『赤毛のアン』の物語の始まりが、ブロンテ姉妹の父パトリック・ブロンテが生まれた1777年からちょうど100年後の「1877年」とされていることにも、モンゴメリの意図が込められているように思えてきます。

『ブロンテになりたかったモンゴメリ』でご紹介したように、アン・シャーリーの誕生月である3月はシャーロット・ブロンテの命日3月31日から、エミリー・バード・スターの誕生日である5月19日はアン・ブロンテの命日5月28日とエミリー・ブロンテの命日12月19日を組み合わせたものからである可能性を考え合わせてみても、モンゴメリはシャーロットとその家族の誕生年や没年月日を、アン・シャーリーの物語に色濃く反映させていたことがわかります。

このように、モンゴメリは「実在した人物の年譜を物語に埋め込む」という仕掛けを、アン・シリーズを通して行なっています。

それはブロンテに纏わる人々に限ったことではありません。

それらを読み解いていくとモンゴメリの「秘密」が浮かび上がってくるのです。

第3節 アン・シャーリーの誕生日

『アンの幸福』には、「小さなエリザベス」と呼ばれる女の子が登場します。

アンの下宿する柳風荘のお隣の”Evergreens（常磐木荘）”に「囚われの身」で住んでいるその女の子は、ミルクを届けるアンと塀の扉越しに出会うことで仲良くなりますが、彼女とアン・シャーリーは同じ誕生日であることが「一年目の11章」に記されています。

そもそもアンの3月生まれという設定は、シャーロット・ブロンテの命日が3月31日であったからと推察されるのですが、だからと言ってアン・シャーリーの誕生日が3月31日という訳ではないでしょう。

エミリー・バード・スターの誕生日が二人のブロンテの命日の組み合わせであったように、アンの誕生日も二人の命日の組み合わせではないかと思われま

す。そしてブロンテ姉妹には有名な3人の他にも早くに亡くなった二人の姉がいて、それぞれ次のような命日になっています。

マリア（あるいはマライア）・ブロンテの命日 5月6日

エリザベス・ブロンテの命日 6月15日

マリア（あるいはマライア）の「5月」は、アン・ブロンテの命日の「5月」と同じ。残ったエリザベスの命日「15日」から取られている可能性が大なのは、『アンの幸福』でアン・シャーリーと誕生日が同じと置かれているのが「小さなエリザベス」だからです。こうして素直に考えれば、

アン・シャーリーの誕生日は**3月15日**

ということになります。

これについては、アン・シリーズ3冊目にあたる『アンの愛情』の27章ですでに、それらしい記述があります。

「三月の半ばごろ」パティの家の持ち主から手紙が届き、4月の試験に備えて勉強しているアンたちがその手紙について話すシーンの後、フィリパと二人で散歩に出かけたアンは彼女が婚約したことを聞き、ロイ・ガードナーから届いた誕生日プレゼントに思いを馳せています。

「あたしの誕生日には、すみれの箱に添えて、なんと美しい短詩をおくってくれたことだろう！ アンはそれを1行のこさず暗記してしまった。」 村岡花子訳

また、最後に執筆された『炉辺荘のアン』でも、アンの長男ジェムが母親の誕生日のお祝いにネックレスを贈るエピソードが置かれていますが、その辺りの描写からもアンの誕生日が3月の半ばであることが明示されています。

おそらくモンゴメリがエミリー・シリーズを構想し始めた1911年ごろに、エミリーの誕生日がブロンテ姉妹の二人から取られた際、アン・シャーリーの誕生日もただの「3月」ではなく何月何日であるかの詳細設定がなされたのではないのでしょうか。

2021年4月追記：実は「小さなエリザベス」については、もう一人の実在の人物がそのモデルとして考えられます。

それは、現英国女王、エリザベス2世です。

彼女は1926年4月21日生まれであることが、ウィキペディア等で確認できますが、モンゴメリの『アンの幸福（"Anne of Windy Willows"）』が出版された1936年には、エリザベス女王はまだ10歳の少女でした。

『アンの幸福』に出てくる「小さなエリザベス」も8～10歳（物語の3年間で）であり、年齢的にもほぼ一致していますが、アン・シャーリーのモデルであると推定されるシャーロット・ブロンテの誕生日は1816年4月21日。

アン・シリーズの物語の中で「小さなエリザベス」とアンの誕生日が同じと置かれている（『アンの幸福』一年目の11章を参照）ように、エリザベス2世とシャーロット・ブロンテの誕生日も同じであったことがわかります。

モンゴメリは様々な符合をアン・シリーズに散りばめることで、裏設定への鍵を読者に残しています。

その一方で、「小さなエリザベス」はシャーロット・ブロンテの夭折した次姉エリザベス・ブロンテをモチーフにしていることは、両者の名前の一致だけでなく、その享年が満10歳で「小さなエリザベス」の置かれた年齢とほぼ一致していることから確認できます。（補章その2を参照）

モンゴメリが晩年になって描いた「小さなエリザベス」は、二人の實在した少女エリザベスの像（イメージ）を重ねたものだったのでしょう。

これはモンゴメリのいつものやり方であり、マリラもアヴォンリーもメイフラワーも、二重三重を重ねたイメージの中から浮かび上がった像なのです。（マリラは本稿第1章2節と3節、補章その3を、アヴォンリーは本稿第4章と補章その1、そしてnoteサイトの『アン・シリーズは続くよどこまでも』の2021年7月8日追記箇所を、メイフラワーについてはnoteサイトの『アン・シリーズのメイフラワー』をご参照ください。）

エリザベス王女はモンゴメリが亡くなって10年後の1952年、エリザベス2世として即位され、現在に至ります。

第 3 章 Anne's House of Romance

第1節 ボーリングブローク

「この3月で満十一になったの」アンは諦めて小さな溜息をつき、ありのままの事実を語りだした。「生まれたところはノヴァ・スコシャのボーリングブロークで、お父さんの名前はウォルター・シャーリー。ボーリングブローク高校の先生だったの。お母さんの名前はバーサ・シャーリーというの。ウォルターもバーサも素敵な名前じゃないこと？【中略】お父さんたちはボーリングブロークで、小ぢな黄色い家で所帯をもったんです。私は一度もその家を見たことはないけれど、なんでも想像したわ。客間の窓には忍冬（すいかずら）がからんでるし、前の庭にはライラックが植わってて、門を入ったところには鈴蘭が咲いていたにちがいないと思うの。」『赤毛のアン』村岡花子訳 5章より

モンゴメリは、アン・シャーリーの生まれた場所をノヴァ・スコシャのボーリングブローク”Bolingbroke”と名付けました。

しかし、実際のノヴァ・スコシャにはそのような地名はありません。

では、その名前はどこから来たのでしょうか。

これもまた、シャーロット・ブロンテの『ジェイン・エア』からのようです。

『ジェイン・エア』をお読みになった方はお分かりの通り、そこにも「ボーリングブローク」という名前は出てきません。

しかし、この名前につながる登場人物がいるのです。

『ジェイン・エア』の後半で、ロチェスターの屋敷から逃げ出したジェインは無一文で荒野を彷徨いますが、若い牧師とその姉妹が住む荒野荘（ムア・ハウス）にたどり着き、一命を取り留めます。

その後いとこ同士（近い血縁という意味での”kindred”）であったことがわかる、その若き牧師の名はセント・ジョン”St. John”。

ジェインを助けてから10ヶ月後に、布教のため一緒にインドに渡って欲しいとプロポーズするのですが、今でもロチェスターの事が忘れられないジェインに断られたセント・ジョンは一人で旅立ちます。

シャーロット・ブロンテの研究者たちによると、このセント・ジョンのモデルは、22歳のシャーロットに求婚して拒絶されたヘンリーという副牧師（シャーロットの親友エレン・ナッシーの兄）とされています。

実は、この実在の「ヘンリー」と『ジェイン・エア』の「セント・ジョン」を二つ合わせた名を持つ歴史上の人物が、アン・シャーリーの生まれに大きく関わっていたのです。

それが「ヘンリー・St(セント)・ジョン」、又の名を「初代ボーリングブローク “Bolingbroke” 子爵」。

ボーリングブローク子爵は”Anne of Green Gables” ならぬ “Anne of Great Britain”、すなわちアン女王時代のトーリー党政権下で国務大臣を歴任した人物です。

アン女王崩御の後に失脚してフランスに亡命し、アン女王で終わってしまったスチュアート “Stuart” 朝を復興させるため、同じくフランスに亡命していた James3 世（スコットランド王としては 8 世）を Great Britain 王国の君主の座に付けようとした。

つまりモンゴメリは、生まれて 3 ヶ月で両親を熱病で亡くしたアンの生まれ故郷を、スチュアート朝再興に奔走した人物に因んでボーリングブロークと名付けたのです。

モンゴメリの中の「失われた世界への憧憬」が滲んで見える名前と言えます。

第 2 節 スコットランドへの忠誠

さてここで、ボーリングブローク子爵が再興させようとしたスチュアート “Stuart” 朝について、少しまとめておきましょう。

スコットランドと、後にはイングランドの歴代君主を輩出したスチュアート “Stuart” 家は、その祖先をフランス・ブルターニュ地方のドル “Dol” に居たブレトン “Breton” 人の小貴族アランに遡ることができます。

このアランの息子であるフラールド・フィッツアランと孫のアランが、イングランド王ヘンリー 1 世の要請でイングランドに移住したとされています。

12 世紀になると、フラールドの孫ウォルター・フィッツアランが、イングランド王ヘンリー 1 世を父に、スコットランド王の娘を母にもつモードという女性を支えたことで、モードの叔父であるスコットランド王デイヴィッド 1 世から王室執事長 “Lord High Steward” に任命され、これが家名になりました。

因みにシャーロット・ブロンテの『ヴィレット』41 章にある、主人公ルーシー・スノウがポール・エマニュエル教授に告げた台詞

“I will be your faithful steward”

「わたくし、あなたの忠実な執事になりますわ」（拙訳）

は、この史実を想起させるがゆえに一層印象的なものとなっているのです。

さて、13世紀の終わり頃にイングランドがスコットランドを属国にしようと侵略した際に、ロバート・ブルース王の下でスコットランドは息を吹き返し、1314年のバノックバーンの戦いで大勝利して、スコットランドは独立を保ちます。

「国民的英雄として記憶されている」「最も偉大なスコットランド国王のひとり」
以上ウィキペディア「ロバート1世（スコットランド王）」より引用

とされるロバート・ブルース王の娘婿となったのが、スチュアート家6代目にあたるウォルター・スチュアートでした。

こうしてスコットランド王室に連なったスチュアート家の7代目がロバート2世として1371年に即位、スコットランドにスチュアート朝が開かれます。

ちなみに、StuartはStewardのフランス語形で、意味は同じです。

フランス帰りのメアリ女王の時代にStewardがStuartに改められました。

ところで、シャーロット・ブロンテが『ジェイン・エア』の32章と33章で引用し、モンゴメリの『赤毛のアン』29章にも引用されている詩『マーミオン』は、18世紀後半から19世紀前半に活躍した詩人・小説家であるウォルター・スコットの作品ですが、この詩人の祖先は「スチュアート朝の庶流の分流」とされています。

ウォルター・スコットは、英国の人々の暮らしの中から消えかかっていたスコットランドの文化を、ロマンティックな詩や歴史小説を通じて再評価した作家ですが、10代の頃のモンゴメリもこの大人気作家が著した”Gypsy stories（ジプシー物語）”と呼ばれる作品の数々を愛読していたと日記に書いています。

このウォルター・スコットと同じ名を、アン・シャーリーの父親だけでなくアンの子ウォルターにも名付けているモンゴメリは、新婚旅行で英国を巡った折に、彼のモニュメントの立つエディンバラ・ウェイヴァリー駅から列車でアボッツフォード邸“Abbotsford House”へと向かう聖地巡礼を行なっています。

アボッツフォード邸は、フランスからの亡命者だったシャーロット・シャーパンティア（あるいはカーペンター）という女性と結婚したスコットが、物語詩で名声を博してから移り住んだ邸宅です。

スコットランドのボーダーズ地方にあるメルローズ修道院の大修道院長“Abbots”が渡ったツイード川の浅瀬“ford”のそばにあることから、ウォルター・スコット自ら「アボッツフォード“Abbotsford”」と名付けたこの邸宅で、後世に多大なる影響を与えた数々の歴史小説が生まれました。

スコットランドの廃墟となった城や修道院から運んだ彫刻石を壁に貼り、ミニチュアのお城の様なその外観も手伝って、モンゴメリが訪れた当人も人気スポットだったため、とても混んでいて難儀したことが日記や自叙伝に書かれています。

アボッツフォード邸から真東に3マイル（グーグルのルート検索による）の地にあるメルローズ修道院“Melrose Abbey”は、歴代の王や貴族が眠るかつてのスコットランドの母教会の遺跡で、1921年にはロバート・ブルース王の心臓が入った小箱が見つかっています。

モンゴメリは、王の心臓が入った小箱が発見される10年前にメルローズ修道院の廃墟を訪れ、感慨に耽っています。

「スコットランド王にして国民的英雄の名を馳せたロバート・ブルースの心臓も、ここに葬られているという—聖地パレスチナの土に埋葬されたかの如く、安らかに眠りについているのだ。」

『険しい道—モンゴメリ自叙伝』山口昌子訳 p.126 篠崎書店

ロバート・ブルース王の名のフランス語表記は Robert de Bruys。

この「Bruys」、ブライスと読めませんか？

さて、1850年の夏、生涯最初で最後のスコットランドを旅したシャーロット・ブロンテも、その2~3日の短い滞在中、エディンバラやメルローズ、アボッツフォード邸を訪れていて、その時に受けた感銘を、彼女の才能を最初に認めた出版人の W.S. ウィリアムズに次のように書き送っています。

「エディンバラはロンドンに比べると、経済学の退屈な大論文に比べられた歴史の生き生きした一ページのようです。メルローズとアボッツフォードについていえば、その名称そのものが音楽と魔力をもっています。【中略】つねづね観念としてスコットランドが好きでしたが、いま現実としてはるかに好きになりました。【中略】どうか、あなたの偉大なロンドンが『わたし自身のロマンティックな都』ダン・エディン（拙注1）に比べると、詩歌と比較させた散文、あるいは稲妻の閃光のごとく簡潔で明るく、清浄で生命感にみちた抒情詩に比較された、騒々しく散漫で退屈な大叙事詩のようなものだといっても、わたしが冒瀆しているなどとは思わないでください。ロンドンにはスコットの記念碑のようなものは何もありません。仮にあったとしても、建築のすべての栄光が寄り集まったとしても、アーサーズ・シート（拙注2）のようなものは何もありません。」

『シャーロット・ブロンテの生涯』エリザベス・ギヤスケル著 中岡 洋訳 第20章より

拙注1：エディンバラ一帯に存在したブリトン人の王国ゴドディン“Gododdin”がノーサンブリア王国の支配下に入る前までのエディンバラの名前

拙注2：アーサー王の玉座の意

まるでシャーロットのスコットランド旅行をなぞるように、スコットランドを旅したモンゴメリは、新婚旅行の最初の目的地として「グラスゴーからオーバン」まで足を伸ばしています。

そこはエディンバラやメルローズのアボッツフォード邸を訪れたシャーロットが、そのまま旅を続けたいと願いながらも叶わなかった地です。

シャーロットはなぜ、アーガイル地方の一都市オーバンに行きたかったのでしょうか。

そして、モンゴメリはなぜその地を訪ねたのでしょうか。

第4章 原郷の地

第1節 アヴォンリーは古メルローズ

「アヴォンリーは、セント・ローレンス湾につき出た三角形の小さな半島を占めており、両側に水をひかえているので、ここからは出て行く者もはってくる者もかならずこの丘の道を越えなくてはならないので、しよせん、リンド夫人のぬけめのない監視をのがれることはできなかった。」『赤毛のアン』村岡花子訳 1章より

プリンス・エドワード島の地図を見ても、「両側に水をひかえている」「セント・ローレンス湾につき出た三角形の小さな半島」はちょっと見当たりません。強いていうなら島の西端に「湾につき出た」部分がありますが、後はただ緩やかに湾曲している綺麗な海岸線がスーッと伸びているだけで、どうも様子が異なります。

さて前の章で、スチュアート家の祖であるケルト系英国人 Breton (ブレトン) について触れましたが、ブレトンが居たフランスのブルターニュは、ローマ時代には Armorica (アルモリカ) と呼ばれていました。

Armorica は、同じくケルト系の言葉であるウェールズ語の”Ar y Mor” と同じ”Place by the Sea (海に開けた場所)” という意味です。

モンゴメリが生まれ育ったプリンス・エドワード島は、まさに”Place by the Sea (海に開けた場所)”。

しかし、『赤毛のアン』の舞台としてモンゴメリが描写した「プリンス・エドワード島」は、現実のプリンス・エドワード島そのものではないように思われます。

同じく前章でご紹介したスコットランドのボーダーズ地方にあるメルローズ修道院”Melrose Abbey” は、1124年に建てられていますが、その真東3マイル(グーグルのルート検索による)の場所にはリンディスファーンの聖エイダン”Saint Aidan of Lindisfarne”という人物がメルローズ修道院の500年も前に創建した、古メルローズ”Old Melrose”というケルト修道院があったそうです。

この古メルローズの元々の呼び名は”Mailros”といい、古ウェールズ語やブリトン語で「裸の半島”the bare peninsula”」という意味だそうですが、「半島」といってもこれは「ツイード川の地峡”a neck of land by the River Tweed”」のことを指しているとウィキペディアにあります。(“Melrose, Scottish Borders”の”History”の項を参照。)

「地峡」とは何か、調べてみると「水域に挟まれて細長い形状をした陸地」のことであり、地図で確かめると古メルローズのあった場所はツイード川が大きく湾曲した、その内側の陸地部分でした。

モンゴメリが、

“Avonlea occupied a little triangular peninsula（アヴォンリーは小さな三角形の半島を占めている）” “with water on two sides of it,（両側に水をひかえている）”

と描き出しているアヴォンリーの形状と、古メルローズの建っていた場所の地形は、とても似ています。

2020年11月追記：現在の古メルローズ“Old Melrose”の風景は、こちらのサイトをご覧ください。

<https://images.app.goo.gl/C6jJvKunfEbEPqidA>

第2節 マシュウとマリラの由来

古メルローズを創建したリンディスファーンの聖エイダンは、651年に亡くなります。

その時、聖カスバートと後の世に呼ばれることになる人物が、聖エイダンが天使に導かれて天国へ昇る夢“**a vision on the night**”を見たことで、その意志を継ぐものとなったと言い伝えられています。

聖カスバートは古メルローズの近くで育った人で、そこで修行した後に聖エイダンが古メルローズよりも前に開いたリンディスファーン修道院の島に移って活動を始め、やがて英国でもっとも有名な聖人になったそうです。

しかし、様々な場所へ布教に歩いた人生の晩年は、一人庵に籠って黙想的な生活を望んだとか。

リンディスファーン修道院のある島は、今でも“Holy Island（聖なる島）”と呼ばれ、モンゴメリも新婚旅行で訪れています。

古メルローズの地には、リンディスファーンの聖エイダン“**Saint Aidan of Lindisfarne**”と聖カスバート“**Saint Cuthbert**”が居たわけですから、『赤毛のアン』のリン

ド“Lynde”夫人、並びにマシュウとマリラのクスバート“Cuthbert”兄妹のそれぞれの苗字はここに由来しており、古メルローズはアヴォンリーの原型であると言っても良いのではないのでしょうか。

ケルト系であるブリトン人の居住地に、リンディスファーンの聖エイダンがケルト・キリストの教えの場を開いた歴史と、リンド夫人が『赤毛のアン』の物語の扉を開く役回りところが重なりますし、またどちらのクスバートもその土地を豊かに耕している、そんなイメージです。

Lind と Lynde はスペルが異なりますが、モンゴメリは綴りにこだわっていないことは『ブロンテになりたかったモンゴメリ』のII章でも触れました。

『モンゴメリ書簡集I』にある1911年5月4日の手紙の原注には次のように書かれています。

「モンゴメリは、以前、彼（拙注：モンゴメリの夫）の姓を McDonald と綴っていたのが、ここでは Macdonald と正しく綴っている。後に彼女は彼の名を Ewen ではなく、Ewan と書いている。また、彼女は、1911年の後半になるまで、ジョージ・ボイドの姓をまちがって綴っているが、この時になってやっと MacMillan と書いている。後に、親友の名を Fredericka ではなく、Frederica と綴っている。」

モンゴメリがスペルにこだわらなかったのは、綴りが苦手だったからではありません。育ての親である母方の祖父から、スコットランドの血を受け継ぐモンゴメリにとって、スコットランド由来の名前は、歴史的勝者であるイングランド式綴りよりも、その「音」こそが大切だったのでしょう。

だから「リンド」のスペルの違いも、気にしなくて良いのです。

それと同じことが、「アヴォンリー」にも言えるのではないのでしょうか。

一般的にアヴォンリー“Avonlea”という架空の名前は、シェイクスピアの生誕地であるストラトフォード・アポン・エイヴォン“Stratford-upon-Avon”から取られたとされています。

しかし、「アヴォン」と「エイヴォン」ではモンゴメリにとって大切な「音」が違うのです。

それよりも、前述したように古メルローズの地がアヴォンリーの元型であるならば、その3マイル（拙注1）西にあるメルローズ修道院“Melrose Abbey”のAbbeyの”Ab”や、そのまた3マイル（拙注2）西にあるウォルター・スコットのアボッツフォード“Abbotsford”邸のAbbotsの”Ab”から、アヴォンリーのアブの音が取られた可能性もあるのではないのでしょうか。

（拙注1と2：どちらの表記もグーグルのルート検索による。）

ちなみに、『赤毛のアン』37章でマッシュウはアベイ銀行が破産したニュースを知り、ショックで亡くなってしまうのですが、その「アベイ」のスペルも Abbey（アビー）で「修道院」という意味です。

モンゴメリの言葉の響きへの鋭い感性は、『赤毛のアン』5章に置かれた次の二つの印象的なシーンからもよくわかります。

”Shore road sounds nice,” said Anne dreamily. “Is it as nice as it sounds? Just when you said ‘shore road’ I saw it in a picture in my mind, as quick as that! And White Sands is a pretty name, too; but I don’t like it as well as Avonlea . Avonlea is a lovely name. It just sounds like music.”

「海岸通りってすてきに聞こえるわ。名前とおなじようにすてきなところかしら。伯母さんが海岸通りっておっしゃったとたんに、ぱっとその景色が目にかんじたのよ。それにホワイト・サンドも綺麗な名だけれど、でもアヴォンリーほどじゃないわ。アヴォンリーはたまらなく、いい名前ですもの、音楽みたいな響きがするわ。」『赤毛のアン』村岡花子訳 5章より

“I guess it doesn’t matter what a person’s name is as long as he behaves himself,” said Marilla, feeling herself called upon to inculcate a good and useful moral.

“Well, I don’t know.” Anne looked thoughtful. “I read in a book once that a rose by any other name would smell as sweet, but I’ve never been able to believe it. I don’t believe a rose would be as nice if it was called a thistle or a skunk cabbage. ”

「その人が正しい行いをするかぎり、名前などどうでもかまわないことです」ためになる教訓をたれるのはこのときとばかりにマリラは言った。

「そうかしら」とアンは考えぶかそうな表情をした。「いつか本に、バラはたとえ他のどんな名前でも同じように匂うと書いてあったけれど、あたしどうしても信じられないの。もしばらが、あざみとかキャベツなんていう名前だったら、あんなにすてきだとは思われないわ。」『赤毛のアン』村岡花子訳 5章より

後者のアンのセリフは、音と匂いの豊かな共感覚を持つモンゴメリの感性が、シェイクスピアの『ロミオとジュリエット』にある

”That which we call a rose by any other name would smell as sweet.”

(私たちがバラと呼ぶものは、他のどんな名前でも呼ばれても、同じように甘く香るわ)

というジュリエットの言葉を「真逆」に置いたものですが、モンゴメリと同じ共感覚を

持たない人にはシェークスピアをもじったとしか受け取れないかも知れません。
「音楽みたいな響きがある」アヴォンリーの由来についても、もう少し沼深く考察したいところですが、それは補章その1にて試みることにします。

2021年2月1日追記：上記引用箇所の前には、アンの次のようなセリフがあります。

「ウォルターもバーサもすてきな名前じゃないこと？ 両親がすてきな名前なので、とてもうれしいわ。もし、ええと、ジェデディアなんていうんだったら、ほんとうに恥ずかしいと思うわ。そうでしょう？」『赤毛のアン』村岡花子訳 5章より

「あたしのお父さんも、ジェデディアという名だったとしても、よい人にはちがいないけれど、でもがっかりだわ。」『赤毛のアン』村岡花子訳 5章

ジェデディア（原文表記”Jedediah”）というのは、ウォルター・スコットのいわゆるペンネームで、有名なウェイバリー小説群の一部分を成す”Tales of My Landlord”シリーズは、この Jedediah という名の架空のエディターによって出版されたことになっています。

『赤毛のアン』出版当時の読者たちは、ウォルターだのジェデディアだのというアンのセリフから、当然のようにウォルター・スコットを連想して、こまっしょくれたアンのセリフを面白がったのでしょう。

尚、Jedediah の日本語表記には「ジェディダイア」もあります。

次にご紹介するのは、スコットランドをイングランドの侵略から守り抜いた王ロバート・ブルースの時代である1320年に、アープブロス大修道院長 “Abbot of Arbroath” が書き下ろしたとされる独立宣言からの一部抜粋です。

「われわれ100人が生きている限り、イングランドの支配下におかれることに同意はしない。なぜなら、それは名誉にも、富にも、名声にもならないからである。われわれはただ、自由を求めて闘う。その自由とは、誠実な人間が生きている限り、決して失うことはない。」

『スコットランド国民の歴史 1560-1830』T. C. スマウト著 原書房 p.12

”while a hundred of us remain alive, we will not submit in the slightest measure, to the domination of the English. We do not fight for honour, riches, or glory, but solely for freedom which no true man gives up but with his life.”

エミリー・ブロンテの有名な詩「富は問題にならぬ」の原型とも思えるこの格調高い宣

言書には、スコットランドの人々が抱く血筋への強い誇りが感じられます。

なお、この独立宣言の500年も前である839年に古メルローズ修道院を襲撃したダルリアダ王国の王ケネス一世“Kenneth I”が、スコットランドの最初の王となったという伝説があるそうです。

これについては第5章3節をご参照ください。

第3節 川と森の重なり合うイメージ

『赤毛のアン』の冒頭で、アヴォンリーの小川は「ずっと奥の方のクスバート家の森から」リンド夫人の住む窪地へと流れ、森の奥には「思いがけない淵や、滝などがあって、かなりの急流だそう」と描写されています。

前章にも書いたように、アヴォンリーが占めているのは「小さな半島」であり、奥まったところにあるクスバート家の森は、アヴォンリーの出入り口に当たる丘やそれを臨むリンド夫人の窪地よりも「湾につき出た」側にあるのですが、なぜかそこは海ではなく森に囲まれたような風景が描写されています。

なんとも不思議な場所から流れてくるアヴォンリーの小川は、もしかしたらウォルター・スコットが『マーミオン』のなかで謳ったスコットランドのボーダーズ地方を流れるツイード川のイメージから、モンゴメリの想像力が描き出したものかもしれません。

上流域はスコットランドの山あいの谷間を流れ、アボッツフォード邸やメルローズ修道院、古メルローズの跡を通り抜け、下流域はそのままイングランドとの境界線となって北海へと注ぐ、大きく蛇行して流れるツイード川。

その全長は156キロもあり、上流には「マーリンの谷“Merlin’s Valley”」という伝説の場所もあるのだとか。

この情景を『マーミオン』の物語詩からイメージしながらプリンス・エドワード島の風景に重ねて描いた空想世界が、『赤毛のアン』の舞台アヴォンリーであったに違いありません。

さて、アヴォンリーの小川の源を隠すクスバート家の森は、『赤毛のアン』の1章でこんな風に描写されています。

「果樹園にかこまれた、だだっぴろいクスバート家【中略】息子におとらず内気で無口なマシウの父は、出来るだけ人から遠のいた森の中へでも引っ込みたいところを、その

一步手前の地所に屋敷をさだめた。その開墾地のはずれに『緑の切妻』の家は建てられて今日におよんでいるので、アヴォンリーの家々が仲よくたちならんでいる街道からはほとんど見えなかった。リンド夫人からみると、そんな奥まったところにいたのでは、住むという意味をなさないのだった。」

そして、そのリンド夫人曰く

「こんなところに自分たちだけで暮らしているのだもの、マシュウも、マリラも変わった兄妹さね。木じゃあ話し相手にゃならないのに、木でよかったら、いやというほどあるけれどね。わたしなら人間のほうがいいな。とにかくあの人たちは満足しきってるんだよ。」

という場所です。

実は、これととても似た描写がされている場所が、シャーロット・ブロンテが描いた『ジェイン・エア』のラストに出てきます。

それはファーンデイン “Ferndean” の館。

「ファーンデイン荘園の館は、森の奥ふかくに隠れていて、ずいぶん古びていた。【中略】人に貸そうと思ったが、不便で健康にもよくない土地だった【中略】館のすぐ近くまで行っても、家の姿は少しも見えぬほどに、まわりの陰うつな森の木々が、ふかぶかと暗く茂っていた。」『ジェイン・エア』阿部知二訳 第37章より

ソーンフィールドの邸宅が焼け落ちて、火を出した張本人である狂った妻バーサ（アン・シャーリーのお母さんと同じ名ですね）が死に、彼女を助けようとして両目の視力と右手を失ったロチェスター。

今はソーンフィールドから「三十マイルほど離れた」「ずっと辺鄙で奥まった」土地にあるファーンデインに、老夫婦の召使2人とひっそり暮らしていたのですが、そこにジェインが現れるという展開です。

ファーンデインのファーン (fern) は植物のシダのことで、前に触れたリンディスファーン修道院のファーン (farne) とは、スペルは異なりますが同じ音。

”There is also a supposition that the nearby Farne Islands are fern-like in shape and the name may have come from there.” (拙訳：近接するファーン諸島はシダ植物のような形状をしており、名前はそこからきたことも推測される。)

と、ウィキペディアの "Lindisfarne "の"Name and etymology"の項に書かれていますから、スペルは違ってはどちらのファーンも植物のシダを意味しています。

「ジェイン・エアは、ゲイツヘッド、ローウッド、ソーンフィールド・ホール、ムーア・ハウス（マーシュ・エンドとも呼ばれる）での生活を経て、ファーンディーン（シダの谷）・マナーでロチェスターと共に暮らす。【中略】ファーンディーン・マナーが彼女の終のすみかとなるのだ。【中略】鬱蒼とした森の中に、シダとともに『深く埋もれるように存在する』ファーンディーン・マナーは、この時から活気を浴び始める。」『ブロンテ三姉妹の抽斗』デボラ・ラッツ著 第8章より

とブロンテの研究者が記しているように、

「ほとんど木立と見分けがつかなかったほど、その家の朽ちかかった壁は、じめじめとした緑色になっていた」『ジェイン・エア』阿部知二訳 第37章より

というファーンディーンの館は、ジェイン・エアが来たことでこの世で一番幸せな場所へと変わります。

それと同様、『赤毛のアン』では人里離れた森の手前に建つグリーン・ゲイブルズが、アン・シャーリーが来たことで喜びの場へと変わっていくストーリー。

シャーロット・ブロンテはきっと、古（いにしえ）のリンディスファーン修道院の音が生み出すイメージから、ロチェスターが小妖精と呼ぶジェイン・エアが永久（とこしえ）に住む場として、ファーン（シダ）の生えた森の中のファーンディーンを描き出したに違いありません。

そして今度はモンゴメリが、自らの日記や手紙で小妖精と呼ぶアン・シャーリーと、ファーンディーンのファーンの音が連想させる聖クスバートとリンディスファーンの聖エイダンからクスバート兄妹とリンド夫人を創り出し、古（いにしえ）のケルト修道院があった土地の地形を模った空想の場所を「修道院 "Abbey"」「大修道院長 "Abbots"」の"Ab"の音を生かしたアボンリーと呼んで彼らを住ませた・・・。

こうしてみると、グリーン・ゲイブルズ "Green Gables" の切り妻屋根は、ペンキで塗られた緑色ではなく、ファーンディーンのように苔むした緑であり、そうした「侘び寂び」に通じる世界観が根底に流れているからこそ、それを感じ取ることのできる日本で根強い人気となっているのかもしれない。

アヴォンリーの名前については補章その1で沼深く考察しています。

第5章 白バラのヴィジョン

第1節 マシュウのスコッチローズ

モンゴメリとシャーロット・ブロンテは、「失われた」スコットランドにロマンティックな郷愁をいづく感性をもつという点で共通しており、そんなシャーロットの作品から得た数々のインスピレーションが『赤毛のアン』の初期設定に込められていることはこれまで示した通りです。

「ものによっては縫いものも面白いかもしれないけど、つぎものにはちっとも想像の余地がないわ。」『赤毛のアン』村岡花子訳 13章より

とマリラにぼやく針仕事が苦手な少女アン・シャーリーが、シャーロット・ブロンテが

「彼女は時折縫いものをとり上げる。だがどういう運命の定めか、五分以上静かに座って仕事を続けることが決してできない。指貫きをはめるとか、針に糸を通すとかすると思うと、突然何かを思いついて、二階に上がる。」『ブロンテ全集4』都留信夫訳 p.77 みすず書房

と『シャーリー』で描いたシャーリー・キールダーと似ているのも、アン・シャーリーの瞳が時にシャーロット・ブロンテの『ジェイン・エア』のジェインと同じ緑色であったり、時にシャーリー・キールダーと同じ灰色であるのも、決して偶然ではないのです。

ところで、『赤毛のアン』の37章には次のような件（くだり）があります。

「あたし、きょうの午後、マシュウ小父さんのお墓にばらを植えてきたんです」アンは夢見るように言った。「ずっと昔に小父さんのお母さんがスコットランドから持ってきた、小さな白いスコッチローズの小枝を挿し木してきたんです。小父さんは、そのばらがいちばん好きだっていつも言っていました。」『赤毛のアン』村岡花子訳 37章より

ここに描かれた白バラもブロンテ姉妹とのつながりを示しています。

ウィキペディアの「ヨーク朝」のページには

「ヨーク家のシンボルは白薔薇であり、今もヨークシャーとジャコバイトの記章として使用されている。」

と書かれています。ブロンテ姉妹が住んでいたハワースはヨークシャーにある村です。シャーロット・ブロンテは、『ジェイン・エア』ではジャコバイトの主要な理論派であったヘンリー・St. ジョン（初代ボーリングブローク子爵）に因んだと考えられる St. ジョンという名前の人物を描いたり、『シャーリー』では「ジャコバイト」というワードを用いて登場人物のキャラクター付けを行ったりしています。

「ジャコバイト」というのは、元々は 1688 年の名誉革命で追放されたスチュアート朝の James2 世（スコットランド王としては 7 世）の復位を支持した政治活動で、スチュアート朝のアン女王が 1714 年に崩御した後は、James2 世の直系男子を正当な国王であるとして度々巻き起こったスチュアート朝復興のための反乱活動を行う人を指し示す名称です。

しかし、19 世紀初頭に活躍した歴史作家ウォルター・スコットはその小説の中で、18 世紀終わり頃にはすでに現実を動かすような活動ではなくなっており、スコットランド文化を守りたい人々が抱くロマンチックな願望のシンボルとして置いています。

モンゴメリが 20 世紀初頭に著した物語の中で、女王と同じ “Anne” と綴られることにこだわった少女が、身寄りのない自分を優しく守り育ててくれたマッシュウ小父さんのお墓に、スコットランドの小さな白いスコッチローズを植えるというエピソードは、まさにジャコバイトのイメージを連想させるものなのです。

第 2 節 アルビオンの馬の記憶

1455 年から 1485 年まで続いたイギリスの王位継承をめぐる内戦は、シェイクスピアが『ヘンリー六世』で白バラと赤バラの抗争としてシンボライズして描き、後にウォルター・スコットにより薔薇戦争と名付けられました。

この 30 年におよぶヨーク家とランカスター家の血で血を洗う争いは、そのロマンティックな呼び名のせいもあり、世界史にそれほど詳しくない人にも知られる史実のひとつとなっています。

ランカスター家＝赤バラというシンボライズは、もともと白バラに象徴されたヨーク家と対称する文学的な表現としてシェイクスピアにより創作されたもの。

では、「白バラ」はどこからきたのでしょうか。

ヨーク家やヨークシャー、そしてジャコバイトの記章として用いられ、エミリー・ブロンテも詩の題材とした”rosy Blanche（白バラ）”。

どうやら白バラのイメージは、英国の人々にとって特別なもののようです。

シャーロット・ブロンテの『ジェイン・エア』23章の冒頭には、英国は元々 Albion（アルビオン）と呼ばれていたことが書かれていますが、アルビオンの意味は「白」。

「ドーバー海峡沿岸地域に広がる崖のチョーク層（白亜層、石灰岩地層）の白さに、この地がその名を呼ばれるようになった由来がある」

とウィキペディアにあります。

一方、rose（バラ）は少し複雑です。

手がかりを求めて彷徨っていた私は、「Rose は薔薇ならぬ馬？」というタイトルのサイトと出会いました。

それをヒントに「ros」を調べてみると、コーンウォール語では「ヒースランド（荒れ野）」や「バラ」を意味し、オランダ語では「馬」を意味し、アイルランド語では「森」や「岬」を意味するとありました。

ケルト修道院の Old Melrose（古メルローズ）も、古ウェールズ語では語尾”rose” が元々は”peninsula（半島）”を意味し、その「半島」は具体的には「地峡」のことだったことは前の章でご紹介した通りです。

つまり、Albion と rose は「白い半島」や「白いヒースランド」あるいは「白い馬」というイメージを表象する組み合わせであり、これはローズマリー・サトクリフが“Sun Horse, Moon Horse（邦題『ケルトの白馬』）”で描いた「白亜層を浮き彫りにすることで地上に描き出された古代の馬型遺跡」と重なります。

英国にはその昔、青銅器時代に「白い馬」のような造形を白亜層から描き出した時代がありました。

その後のローマによる支配を経ることで rose の意味が転じて、いつからか自らを「白バラ」と認識するようになったのではないのでしょうか。

元の意味は失われても、音が残ったのです。

ヨーク家が白バラをシンボルにしていたり、ヨークシャーやジャコバイトが白バラを記章としているのは、古代ブリテン島からのこのような記憶を音の響きの中に持ち続けているからなのでしょう。

第3節 ノーサンブリア王国

ブリテン島の正当な継承者としての誇りを込めた白バラを、歴史の表舞台から降ろされてなお掲げ続ける人たちに強い共感を抱いていたブロンテ姉妹とモンゴメリ。

白バラを記章とするヨークシャーの村ハワースに住んでいたブロンテ姉妹に、白バラへの特別な思いがあることは不思議ではありませんが、カナダのプリンス・エドワード島で生まれ育ったモンゴメリのなかの白バラへの憧憬はどこから来たのでしょうか。

2歳になる前に母を亡くしたモンゴメリは母方の祖父母に育てられましたが、祖父アレクサンダー・マクニールはスコットランドの北西部にあるアウターヘブリディーズ諸島南部を領有していた Macneill (マクニール) 氏族に連なる家系の人でした。

ヘブリディーズ諸島の南に位置するアーガイル地方には、アイルランドのケルト系キリスト教が最初に伝道した地アイオナ島があり、そこからリンディスファーンや古メルローズの地にケルト修道院を創建した人々が渡ってきたという歴史のあるこの島を新婚旅行で訪れているモンゴメリ。

スコットランドはブロンテ姉妹が住んでいたハワースのあるヨークシャーからはだいぶ北に位置します。

しかし、イングランドのほぼ全土がノルマンによる征服を受けるよりも前の時代、アングロサクソンの七王国時代にあった「ノーサンブリア王国」は、北は現スコットランドの首都エディンバラから南は現ヨークシャーまでがその領域でした。

現デンマークのユトランド半島南部からブリテン島に渡ってきたアングル人が、先住のブリトン人諸王国を次第に征服、同化させて建てた王国の一つがノーサンブリア王国です。

このアングル人の王国が存在したことで、その地に残ったアルピオンの先住者であるブリトン人にとって重要な意味を持つ「白バラ」という表象が、現在でもヨークシャーとジャコバイトの記章として使われているのかもしれませんが。

ノーサンブリアが王国となる少し前の時代、ブリテン島に勢力を広げつつあったアングル人の王オズワルド "Oswald" は、若い時分に亡命先だったダルリアダ王国でケルト・キリスト教に改宗していたことから、アーガイル地方のアイオナ島からアイルランドの修道士を呼んでケルト修道院を創り、その周辺に住んでいたブリトン人たちにケルト・キリスト教の場を与えました。

(英語版ウィキペディア "Oswald of Northumbria" 参照)

アングル人による征服から逃れた多くのブリトン人がいた一方で、アングル人の王国に

留まってノーサンブリアの民となった人々がいたのも、やがてノーサンブリアのアングル人たちがケルト・キリスト教へと改宗していったのも、リンディスファーンや古メルローズ修道院があったからこそなのでしょう。

そして、元々は「裸の半島（地峡）」を意味する”Mailros” という土地の名が Melrose に転化したのも、英語を話すアングル人の侵入とともに”rose（ローズ）” =バラのイメージが優位になっていったからではないでしょうか。

ノーサンブリア王国をめぐる変遷の中で、前述した古代ブリテン島の音の記憶である「白バラ」のイメージも受け継がれていったものと想像されます。

古メルローズ修道院が創建されてから、やがてダルリアダ王国の王ケネス 1 世によって滅するまでの期間が、ほぼノーサンブリア王国の年代（西暦 653 年～954 年。ただし 9 世紀の半ばには、ノーサンブリアの領土の南半分がデーン人によって征服されるなど、王国は衰退している。）と重なっているのも興味深い事実でしょう。

ダルリアダというのは、6 世紀の始まりに元々アイルランドの北部にあった本拠地からゲール（＝スコット）人がアーガイル地方へと進出し、やがて独立してできた王国です。アーガイルとはゲール語で「ゲール人の上陸地」の意味だとコチラのサイトに書かれています。（<https://www.takebeyoshinobu.com/?p=1698>）

そのアーガイル地方にあるオーバンという海辺の都市から南へ約 30 キロ離れたダナッドという小高い丘が、ダルリアダ王国の中心地であったのだとか。

ダルリアダの王ケネス一世は、9 世紀に古メルローズを襲撃した後に北方のピクト人を統合してアルバ王国の王となりますが、スコットランド王国はこのケネス一世を始祖としており、現在でもスコットランドはゲール語で”Alba（アルバ）” と表記されています。そして古代王国ノーサンブリアの領地は、北のスコットランドと南のイングランドに分裂するのです。

このようにスコットランドのアーガイル地方は、元々は「自らをアイルランド人と信じるスコット（＝ゲール）人の王が支配する地域」であったわけですが、アイルランド北部出身のブロンテの父方と、アーガイルに近いアウターヘブリディーズ諸島出身のモンゴメリの母方の祖父は、同じ文化圏に属していたのでしょう。

そして、ダルリアダ王国の中心地だったダナッドはスコットランドの歴史において重要な場所であったため、最も近くにある都市オーバンまでシャーロット・ブロンテは行って見てみたかったということなのでしょう。

モンゴメリは彼女の代わりにその地を訪れ、そこからアイオナ島などの島々を船で観光していますが、その先に広がる北の海には祖父の先祖の地がありました。

さて、先にも述べたようにブロンテ姉妹が住んでいたヨークシャーもこの古代王国の領域のなかにはありましたが、ギヤスケル夫人の『シャーロット・ブロンテの生涯』には、彼

女たちが暮らした牧師館に隣接するハワース教会堂の塔の銘板に、ノーサンブリア王国が成立するおよそ 50 年前の西暦 600 年にその礎石が築かれたことが刻まれているとあります。

その銘板の記録が確かなものかどうかはともかく、想像力溢れるブロンテ姉妹がいにしえの王国に思いを馳せながら子供時代を過ごしたことは想像に難くありません。

幼いシャーロットが弟のブランウェルと遊びながら紡いだ『アングリヤ物語』。

アングリヤ “Angria” の空想上の時空間は、アングリヤ “Anglia”（ラテン語で「アングル人の土地」の意味）と字面や音が似ていることから、アングル人の古代王国ノーサンブリアをモチーフにしていたのでしょう。

**アイオナ島の修道士によって古メルローズ修道院が建てられた地を、アヴォンリーの元型としたモンゴメリ。

彼女は、聖クスバートが修行したケルト修道院がダルリアダの王ケネス 1 世に破壊されるまでの歴史の始まりと終わりに、アン・シリーズの始まりと終わり、すなわちアンをグリーン・ゲイブルズに連れて来るマシュウ・クスバートと、アンの娘リラがケネスと結ばれるハッピーエンドとを重ねたのです。 **

2021 年 1 月追記：“Scott’s View” から望む景色の手前に写っている “peninsular of land（半島）” が Old Melrose です。

“Scott’s View” は眺めの良い場所で、そこから見渡せる南西の景色をウォルター・スコットは生涯愛し、彼の乗った馬はいつもその場所で自ら足を止めたそうです。

以下、ウィキペディア “Scott’s View” からの引用。

”Immediately below the viewer is a meander of the Tweed itself, enclosing a peninsular of land on which stood the ancient monastery of Old Melrose, referred to in Bede, where St Boisil welcomed the young St Cuthbert to train following his vision of St Aidan of Lindisfarne in 651ad. ”

（拙訳：すぐ眼下には曲がりくねったツイード川が、古メルローズの修道院がその昔建っていた半島型の地をぐるりと巡り流れゆく。ベダ僧が残した文献によれば、651 年に亡くなったリンディスファーンの聖エイダンのヴィジョンを見たまだ若き聖クスバートが、古メルローズで修行せんと聖ボワジルに迎えられたとある。）

第6章 青春の光と影

第1節 ポリーという愛称

これまでお話ししてきたように、シャーロット・ブロンテのお話からインスパイアされたイメージで形作られた舞台設定と、これからお話するように、モンゴメリ自身の思い出が余すところなく注ぎ込まれている『赤毛のアン』。

そのマニアぶりは『赤毛のアン』だけでなく、アン・シリーズ全般に渡って物語の細部に埋め込まれていくわけですが、シャーロット・ブロンテが生前最後に出版した『ヴィレット』は、少女時代のモンゴメリに強い印象を残した作品だったようです。

モンゴメリが10代半ば頃、「ポリー“Pollie”」という愛称で呼ばれていたことはモンゴメリの日記などから知られています。

しかし、彼女のフルネームはルーシー・モード・モンゴメリ。

「ルーシー“Lucy”」とも「モード“Maud”」とも直接的な音の繋がりががないので、日本人にとってはちょっと不思議なニックネームではないでしょうか。

モンゴメリが「ポリー」と呼ばれていた頃、いつも一緒にいたアマンダ・マクニール“Amanda Macneill”という女の子のあだ名は「モリー“Mollie”」でした。

「ポリー」というのは、由来はわからないけれど鳥のオウムに付ける伝統的な名前だそう。そして、モリーの“M”もポリーの“P”も唇で発音する音であり似ているため、Maryの愛称がPollyになったりするそうです。

このような慣習から、モンゴメリのミドルネーム「モード」の“M”から彼女の愛称が「ポリー」になったことが類推されますが、いつもお喋りに夢中な女の子ペアに、“Mollie & Pollie”とオウムを想起させるような呼び名をつけることで、同年代の男の子たちははかかっていただけのかもしれませんが。

しかし、モンゴメリは「Pollie（ポリー）と呼ばれるのが好き。」と日記に書いています。「ポリー」はオウムとは違う何かに因んで積極的に「呼ばせた」愛称だったのかも知れません。

『赤毛のアン』の3章で、マリラに名前を聞かれたアンが、

「いいえ、あの、あたしの名前ってわけじゃないんですけど、コーデリアと呼ばれたんです。すばらしく優美な名前なんですもの。」

「アンという名を呼ぶんでしたら、eのついたつづりのアンで呼んでください。」村岡花子
訳

と頼む印象的な場面からも、少女だったモンゴメリの様子が思い浮かびます。

幼い頃のモンゴメリは、ルイーザ・メイ・オルコットの愛読者でした。（詳細は『ブロンテになりたかったモンゴメリ』1章をご参照下さい。）

1870年に出版されたオルコットの『昔気質の少女』には、ポリーという主人公やモードというサブキャラが登場しますが、自分のミドルネームと同じ名の少女が登場することで強い親近感を抱いたであろうモンゴメリは、凛々しく描かれている主人公ポリーに対しても、次に述べるような理由から深い縁と憧れを感じたはずです。

オルコットの「ポリー」は作中”Little Polly”と呼ばれていますが、その17年前である1853年に出版されたシャーロット・ブロンテの『ヴィレット』にもポーリーナという少女が登場して”Little Polly”と呼ばれています。

おまけに、オルコットのファーストネーム「ルイーザ」が『ヴィレット』の主人公の名付け親として冒頭から登場するルイーザ・ブレトン“Louisa Bretton”夫人と同じであり、物語を読み進めていくと、その夫人のミドルネームが「ルーシー」であることがわかるのですが、それはまさしくモンゴメリのファーストネームと同じでした。

その夫人の名をもらった『ヴィレット』の主人公が、自らと同じルーシーという名前であることは、オルコットの子供向けのお話だけでなくシャーロットの大人っぽい小説も既に読んでいたであろう多感な少女には、シャーロット・ブロンテとオルコットを自分と繋ぐ何か運命的なものと感じられたに違いありません。

その一方で、『ヴィレット』の主人公ルーシー・スノウが内向的な性格でとても寂しい境遇の女性として描かれ、そのラストも一人で生きていくというストーリーに、10代のモンゴメリはどこか歯がゆさを覚えたことでしょう。

対する『ヴィレット』のポリーは、とても気が利く愛らしい女子で、音楽を嗜みピアノを奏でる彼女の周りには若い男性たちが群がります。

モンゴメリの場合は音楽ではなく文学的素養が魅力だったようですが、ティーンエイジャー時代に異性からかなりモテていたとの自負があったことは、彼女の日記からもわかります。

もともと、同じルーシーという名の従姉妹が家の真向かいに住んでいたことで、ミドルネームで呼ばれたがっていた少女モンゴメリ。

「いいえ、あたしの名前ってわけじゃないんですけど、ポリーと呼ばれたいんです。」

「eのついたつづりのポリー “Pollie” で呼んでください。」

と家族や周囲の友人たちに求めた姿が想像されるのではないのでしょうか。

そんな『ヴィレット』に登場するポリー（ポーリーナ）は、舌足らずな喋り方の、学校

へは行かずに家庭で教育を受けた美しい乙女ですが、『アンの娘リラ』のリラ・ブライスも、15歳になっても兄姉が入学したクイーン学院には行かずにずっと炉辺荘に居たことや、ケネスとの会話では舌足らずな喋り方になりがちで、美しい娘であったことと符合しています。

第2節 『アンの青春』を彩るシャーロット・ブロンテ

アン・シリーズの第二作目になる“Anne of Avonlea”（邦題『アンの青春』）でも、アンの周辺の間人模様はシャーロット・ブロンテに依っていました。

例えば『アンの青春』で新たに投入したドラ“Dora”やデイビー“Davy”、ポール・アーヴィング“Paul Irving”という子供キャラがそうです。

ドラとデイビーの双子がグリーン・ゲイブルズに預けられますが、二人はシャーロット・ブロンテの『シャーリー』のドーラ・サイクス“Dora Sykes”とデイヴィッド・スウィーティング“David Sweeting”（あだ名がデイヴィ”Davy”）という恋人たちの名前に符合しています。

16章でデイビーは「神学の迷路」からアンによって助け出されますが、『シャーリー』のデイヴィは助祭司（副牧師）なので、この辺りにもモンゴメリのユーモアの小悪魔が出没していることがわかります。

また、小さな詩人ポールは、シャーロットの『ヴィレット』に登場するポール・エマニュエル“Paul Emanuel”教授と同じ名であり、ポールを主人公アンの生徒とすることで、『ヴィレット』でのポールが主人公ルーシーの先生であるという関係性を逆転させています。

余談ですが、ポール・アーヴィングのアーヴィング”Irving”については、『ウォルター・スコット邸訪問記』を著したワシントン・アーヴィング“Irving”に因んでいると思われます。

ワシントン・アーヴィングは、米国人として初めて世界の文壇で認められた作家であり、今でも東海岸で読み継がれている『リップ・ヴァン・ウィンクル』や『スリーピー・ホローの伝説』を著しました。

ワシントン・アーヴィングがウォルター・スコットのアボッツフォード邸を訪問した時期に、スコットが執筆中だったのが『ロブ・ロイ（赤毛のロイ）』という物語であったのも実に興味深い符合でしょう。

赤毛のアンの物語の中で、成人したポール・アーヴィングがアメリカで活躍する詩人となったり、ダイアナ・バーリーの夫の名が「フレッド」であるのは、この辺りの繋がりからと思われます。

シャーロット・ブロンテと『アンの青春』の間には、もっと沼深い符合があります。シャーロットは、生涯に3人の男性を振っていることが研究者から指摘されていますが、実はその3人に因んだ人物を『ジェイン・エア』と『シャーリー』に登場させているのです。

『ジェイン・エア』の St. ジョンが、シャーロットが22歳の時に振ったヘンリー・ナッシーをモデルとしていることは前述の通り。

23歳の時に振った デイヴィッド・ブライスという助祭司は、先ほど触れた『シャーリー』のデイヴィッド・スウィーティングの原型であり、さらにシャーロットが35歳の時に振ったジェームズ・テイラーは、『シャーリー』のキャロライン（2人の主人公のうちのひとり）の実父ジェームズ・ヘルストンの原型であることは、名前の符合だけでなく、彼らの性格描写からもわかることですが、まだあまり知られていないようです。

しかしそこに気づいたモンゴメリ。

シャーロットが描いた『ジェイン・エア』の St. ジョンを、『赤毛のアン』ではアンの生家の地名「ボーリングブローク」に、『シャーリー』の デイヴィッド・スウィーティングを『アンの青春』の双子の デイビーに、そして『シャーリー』の ジェームズ・ヘルストンを『アンの青春』の ジェームズ・ハリソンとして登場させます。

助祭司スウィーティングの明るくて軽いけれど誰からも愛される、歳の割に子供っぽいキャラクターは双子のデイビーを彷彿とさせますし、「若い女性に結婚してはいけない」と教える「危険信号の一つ」であるジェームズ・ヘルストンは、モンゴメリ流のユーモアで描かれた「結婚してはいけない」だらしのない男、ハリソンさんと対になっています。

それから『アンの青春』18章のトーリー街道のネーミングも、シャーロットの『シャーリー』に出てくる「トーリー党」という保守派の党名からですが、これがモンゴメリの手に掛かると、

“Mr. Allan says it is on the principle of calling a place a grove because there are no trees in it,”

「アラン牧師が言いなすったけど、木が一本も生えていない場所を、わざわざ『なになに林』なんてよぶのと同じことすって。」村岡花子訳

という冗談に仕立てあげられます。

トーリー党の紋章には、大きな木が一本描かれています（ウィキペディア「トーリー党」

参照)が、アンの訪ねたトーリー街道には「自由党のマーティン・ボヴェじいさんが住んでいるきり」で、「保守派のトーリー党」の支持者は一人も住んでいないことを「木が一本も生えていない場所」と表現しているのです。

相変わらずアンの周辺にはシャーロット・ブロンテネタが散りばめられている『アンの青春』。

その終わりから二つ目の29章には、次のような描写があります。

「アンは『夢の家』という言葉が口から出たとたんに、その文句が気に入ってしまい、早速、自分の『夢の家』をも計画しました。それにはもちろん、色の浅黒い、気位のたかい、憂鬱そうな顔をした、理想的な主人がいなくてはならない。」村岡花子訳

このいかにもバイロン風な「理想的な主人」のイメージは、『ジェイン・エア』のロチェスターそのものではないでしょうか。

しかし、その後こう続きます。

「ところが不思議なことに、ギルバート・ブライスも、そこにうろうろしていて、アンを手伝って、額をかけたたり、庭の計画を立てたり、そのほか、気位のたかい、憂鬱そうな主人公（拙注：原文ではヒーロー）なら威厳にかかわると考えるであろうような、雑用にいそしんでいた。」村岡花子訳

このようなユーモラスな描写があるからこそ、アン・シリーズは単にシャーロット・ブロンテのオマージュに終わらないモンゴメリ独特の物語となっているのです。

第3節 投影された22歳の死別体験

大好きなシャーロットとその作品から湧き上がったイメージで軽快に書き進められた『赤毛のアン』とは異なり、『アンの青春』は難産だった様子が書き終わった翌月に文通相手のウィーバーに宛てて書かれた文面から伝わってきます。

「もし、残りの人生がアンという'暴走する馬車'に引きずられてゆく運命だとしたら、アンを創造したことを痛烈に後悔するでしょう。」「赤毛のアン」を書きたくなかったモン

これは、「モンゴメリは本当はアン・シリーズを描きたくなかった」ということでは決してなく、'暴走する馬車'だった幼いアン・シャーリーを、落ち着いた乙女へと成長させることにまつわる創作上の苦悩を吐露したものの。

そして、そうする上で欠かせない、キンドレッド・スピリッツという概念の深化を模索していたからなのです。

キンドレッド・スピリッツについては後の第8章に譲るとして、ここでは引き続きブロンテ姉妹やその作品との関連を見ることにしましょう。

モンゴメリは16歳と半年になって少し大人びたアンを、シャーロットよりも落ち着いた性格だった妹のアン・ブロンテの作品に求めました。

例えば、13章のヘスター・グレイ “Hester Gray” のエピソードは、アン・ブロンテが22歳の時に体験した想い人ウィリアム・ウェイトマンとの死別と、モンゴメリ自身も22歳の時に想い人ウィル（ウィリー・ブリチャード）と死別したことが重なっていることから、その共通体験を初めて物語に埋め込んだものと思われます。

アン・ブロンテはその死別体験を処女作『アグネス・グレイ』“Agnes Grey”で昇華していますが、モンゴメリは男女を入れ替えて、女性が22歳で亡くなるエピソードとしてヘスター・グレイを置いています。

なお、Gray と Grey はスペルが異なりますが、発音も意味（灰色）も同じです。

アン・ブロンテが『アグネス・グレイ』で「グレイ」という名を用いたのは、詩人のトマス・グレイ”Thomas Gray”の名からであることは、アン・ブロンテの次の作品『ワイルドフェル・ホールの住人』で主人公ギルバートが想い人ヘレンに伝えた”kindred spirits”（同じ思いを持つ魂）という概念が、トマス・グレイの『墓畔の哀歌』”Elegy Written in a Country Churchyard (1750年)”に詠われた“kindred spirit”をオマージュしたものであることから推察できます。

キンドレッド・スピリッツというワードを世界に知らしめたモンゴメリですから、もちろんこの関係性を知った上での「ヘスター・グレイ」のネーミングであったのでしょう。

村岡花子さんが「恋の蕾」と訳した、『アン青春』19章で描かれるギルバートの”sentiment in the bud”がアンによってすぐに切り取られてしまう関係性は、アン・ブロンテの2作目『ワイルドフェル・ホールの住人』8章にある同様の”bud”のエピソードをオマージュしたものであることは、以前『ブロンテになりたかったモンゴメリ』で指摘した通りです。

『ワイルドフェル・ホールの住人』のギルバートは、

「僕が感情をこめたり、機嫌を取り結んだりしそうになったり、言葉や視線にわずかながらも愛情の兆しが見えたりすれば、その瞬間に僕は彼女の態度の急変で罰せられました。《中略》やっとの思いで芽吹いたつぼみを一つずつ無情にも摘み取っていたのです。」『ブロンテ全集9』p.91 アン・ブロンテ 著 山口 弘恵 訳 みすず書房 1996 年

「僕は目の前の幸運を感謝して享受しながらも、未来にはこれ以上のものと願い、期待することを忘れはしませんでした。しかしもちろん、こうした夢は僕だけのものにしておきました。」『ブロンテ全集9』p.124 アン・ブロンテ 著 山口 弘恵 訳 みすず書房 1996 年

と語っていますが、モンゴメリの描くギルバートも『アンの青春』で、

「ギルバートはまだ少年期を脱したか脱しないに過ぎないが、人並みの夢を抱いており、その未来にはいつも、大きな澄んだ灰色の目、花のように美しい、優美な顔の少女がいた。ギルバートはまた、自分の未来をその女神にふさわしいものにしなければならないと、かたく決心していた。《中略》しかしギルバートは思っていることを言葉にあらわそうとしなかった。このような感情を明かそうものなら、アンは情容赦もなく、それを蕾のうちに切りとってしまうであろうし——あるいはギルバートを軽蔑するにちがいないからだった。それがなにより辛かった。」『アンの青春』村岡花子訳 19 章より

と悩んでいます。

このように、ヒロインに向けて芽生える恋心が蕾 (bud) のうちに摘み取られてしまうという、二人のギルバートの悩みはまさに同じもの。

しかし近年の全文訳だの完全版だのと称する訳本では、“bud” を「蕾」と素直に訳さず、その比喩を表現していないものばかりであるのはなんとも残念です。

アン・ブロンテ、そして自分自身の青春を投影して成長したアンを描いたモンゴメリでしたが、『アンの青春』の執筆が終わった 1908 年 8 月から丸 5 年もの間、アン・シリーズの筆は止まっています。

1911 年の結婚とそれに伴うオンタリオ州への引っ越し、そして 1912 年の出産という大きなイベントが続いたことがその理由ではないことは、『果樹園のセレナーデ (1910 年)』『ストーリー・ガール (1911 年)』『アンの友達 (短編集で「アンの物語」ではない: 1912 年)』や『黄金の道 (ストーリー・ガールの続編: 1913 年)』が、その間に出版されていることからわかります。

そしてモンゴメリの日記には、1913 年 9 月 1 日に『アンの愛情』の執筆が始まったことが記されていますが、そこには何か特別なきっかけがあったのでしょうか。

次章からはその謎を解き明かしていきます。

第7章 シャーロット・ブロンテの恋文

第1節 「島」を離れて運命の人を知る

1913年7月29日。

シャーロット・ブロンテに関する世紀の大スクープが、イギリスの代表的新聞「タイムズ」によって報じられました。

1842～43年にベルギーのブリュッセルへ留学していた際に出会ったエジェ教授に宛てて、シャーロットがイギリスから書き送った手紙のうち4通が発見され、世界に公開されたのです。

そこに綴られていたのは既婚者である教授への恋心でした。

それまでは、『ヴィレット』で描かれたルーシーとポール・エマニュエル教授の恋愛は、作者であるシャーロットとエジェ教授の関係とは似て非なるものであり、シャーロットのエジェ教授への気持ちは生徒と先生の粋をはみ出るものではなかった、という解釈が一般的に受け入れられていました。

シャーロットが亡くなって2年後に、当時の人気作家でシャーロットとも親交のあったエリザベス・ギヤスケルが『シャーロット・ブロンテの生涯』を描いて以来、定説となっていた道徳的なシャーロット像。

それがこのスクープによって一変し、研究者たちは堂々と自説を提示し始めます。

もちろんモンゴメリもすぐにこのニュースを知ったはずですが、なぜか日記には全く触れられていません。

しかしその1ヶ月後の9月1日に、長らく止まっていたアン・シリーズの3冊めとなる”**Anne of the Island**”（邦題『アンの愛情』）の執筆がスタートし、それが1915年に出版されると、そのあと立て続けに”Anne’s House of Dreams”（邦題『アンの夢の家』1917年出版）、”Rainbow Valley”（邦題『虹の谷のアン』1919年出版）、”Rilla of Ingleside”（邦題『アンの娘リラ』1921年出版）を世に送り出すことになります。

このビッグニュースからモンゴメリはどんな着想を得たのでしょうか。

それは、自身の分身とも言えるウィリー・プリチャードとの大切な思い出、既婚者となっていたモンゴメリの秘めざるを得ない思いを、アンの結婚の時間軸と重ね合わせることで、アンの物語に埋め込んでしまうことでした。

1891年8月26日、一年間過ごしたプリンス・アルバートからプリンス・エドワード島に戻るその日に告白され、その後の6年間にわたる文通が1897年4月2日のウィリー・プリチャードの死で終わるまでに交わした二人のやり取りは遺されていません。

熱烈なラブレターの往復だったのかもしれませんが、そうではなかったのかもしれませんが。

もしかすると、ウィル（ウィリー・プリチャード）が他界したことで彼への想いがより深くなったのかもしれませんが。

何れにせよ、ウィルが他界した後も、モンゴメリは彼の姉のローラ・プリチャードと交流を続け、1930年には40年ぶりにプリンス・アルバートを訪ねた折にローラと再会もしていることからわかるように、ウィルはモンゴメリにとって終生特別な人であり続けました。

モンゴメリは、叶わなかった道ならぬ恋を最後の小説『ヴィレット』のなかで成就、昇華させていたシャーロット・ブロンテに倣おうと、『アンの愛情』以降の作品ではアンからギルバートへの戸惑うことない恋心を表現し始めます。

最初からウィルをモデルにギルバートを描いていたことは、最後までモンゴメリだけが知っている秘密であった訳ですが、その思いの証拠となる時間軸を物語に埋め込むことで、ウィルを失った実人生を空想世界で再構築しようとした・・・そうとしか思えないほどの一致が見られます。

第2節 アンとギルバートとフィリパ

18歳と半年になったアンが、憧れのレッドモンド大学で勉学と猫と崇拝者たちに囲まれた4年間を過ごす『アンの愛情』。

この物語の最後で、22歳のアンは病に倒れたギルバートの報を聞き、自分の本当の思いに気づきます。

このプロットには、モンゴメリ自身が22歳の時にウィル（ウィリー・プリチャード）をインフルエンザで亡くした死別体験が重ねられていることは、以前『もっと「赤毛のアン」を描きたかったモンゴメリ』や『ブロンテになりたかったモンゴメリ』で指摘した通りです。

そして「22歳の死別」を免れて相思相愛を確認したアンとギルバートが、前述したヘスター・グレイの庭を共に訪れているのも興味深い符合でしょう。

二人はその後すぐには結婚せず、ギルバートは医科の道へ、アンはサマーサイド高校の校長の職に就き、3年間の文通の末に結ばれます。

この文通期間の物語は、21年後の1936年に出版された『アンとシャーロット』で描かれますが、「3年間の文通」という筋立ては、シャーロット・ブロンテの『ヴィレット』のラストシーンから取られたもの。

アンとギルバートの結婚の前にその3年の月日を挿入することで、モンゴメリはウィルとの思い出をアン・シリーズの時間軸に埋め込むことに成功するのです。

これについては第8章「1891年の夏の夢」でお話しすることにして、まずは『アンとシャーロット』に見られるシャーロット・ブロンテ作品のオマージュやモチーフを幾つかご紹介します。

本来ならアンが16歳で入っていたはずのレドモンド大学に、遅れること2年。

アンとギルバート（とチャーリー・スローン）は、プリンス・エドワード島のお隣ノヴァ・スコシアに渡り、英領植民地時代にさかのぼる古雅な街キングズポートにある大学の門をくぐります。

アンはそこでクイーン学院の旧友プリシラと再会したり、フィリパ・ゴードンという天真爛漫で綺麗な女学生と出会いますが、フィリパはアンとギルバートの生家のある「ボーリングブローク」の出身でした。

この地名は前述の通り、歴史上の人物ヘンリー・St. ジョンの別名と同じであり、またセント・ジョンと言えばシャーロットの『ジェイン・エア』の主要登場人物になります。

アンはプリシラと「オールド・セント・ジョン」という木陰の多い史跡墓地を歩き、墓銘を読んでは空想に浸りますが、そこで親友となるフィリパと出会います。

そして、アンとギルバートの最初の下宿先の住所も「セント・ジョン街三十七番地」。

どうやらモンゴメリは、「ノヴァ・スコシアの架空の場所にヘンリー・St. ジョンにちなんだ名前をつける」ことを好んだようです。

さて、アンとギルバートの親友フィリパの造形は、シャーロット・ブロンテの『ヴィレット』に登場するジネブラ・ファンショーからと思われます。

ファンショーは、『ヴィレット』の主人公ルーシー・スノウと同じ船に乗って英国からベルギーに渡る最中に、ヴィレットという町にある寄宿学校をルーシーに教え、自身もそこに住むことになる英国人女学生。

『アンとギルバートの愛情』のフィリパも大学の2年目以降はアンとプリシラ、そして2年から編入することになったステラ（彼女もクイーン学院でアンと同窓）の4人で「パティの家」という下宿に入りますから、同じ屋根の下に住むという設定が似ています。

ファンショーが相当の美人であるところもフィリパと共通した特徴ですし、派手でフワフワしたところやお金に本当の意味で困ったことのないお嬢様なところも、大金持ちの家の娘フィリパと似ています。

しかし、貴族との結婚を実現するために勉強そっちのけで実行に出るファンショーの積

極的な性格を真面目なルーシーが煙たがるところは、お茶目なフィリパを愛しているアンと異なるところ。

また、念願通りに貴族と結婚したにも関わらず身を落としていくファンショーとは対照的に、アン・シャーリーの影響を色濃く受けたフィリパは、最後には金持ちのボンボンではなく愛する貧しい牧師と結婚し、自身の人生をたくましく歩いていく女性になります。愚かだけれど憎みきれない『ヴィレット』のジネブラ・ファンショーを、モンゴメリはより肯定的に、アンに触発されて成長したフィリパ・ゴードンとして描いたのでしょう。『ヴィレット』のラスト近くで、ファンショーがルーシーに宛てた手紙が読まれるのですが、『アンの愛情』のラストでは、フィリパが機転を利かしたお陰で死の淵にいたギルバートがアンの気持ちを知り、生還するというストーリーの仕掛けとしてフィリパの手紙が置かれています。

第3節 ジェムシーナ伯母さんとジャコバイト

アンやフィリパが移り住む「パティの家」に、家政の担い手としてやってきたジェムシーナ “Jamesina” 伯母さんは可愛らしい白髪のおばあさんで、まだまだ危なっかしいところのある若いアンたちに様々な知恵を伝えます。

その Jamesina という名前は James という名の女性形。

James は、この後のシリーズで登場するジム “Jim” 船長やアンの長男ジェム “Jem” と同じ名前です。

旧約聖書ではヤコブ “Jacob” のことであり、新訳聖書ではジェイムズ “James” と書かれていると、こちらのサイト様にありました。

<https://www.nishikobe-kyokai.or.jp/chfaq/jacobandjames.pdf>

このヤコブ（またはジェイムズ）のラテン語名が Jacobus で、これがジャコバイトの語源となっています。

つまり、モンゴメリは James に因んだ名前の人物をたびたび登場させることで、マッシュウの墓にアンが白バラを植えるエピソードと同様、「スチュアート朝を復興しようとしたジャコバイト」を暗に示しているのです。

ちなみにスコットランド王 James2/7 世や James3/8 世こそが、イングランド、スコットランド、アイルランドの3王国の正式な国王であるとする運動だった為、James → Jacobus（ラテン名）→ Jacobite（ジャコバイト）と呼ばれることになったとのこと。

しかし、プロテスタントの国である英国は、カトリック信仰を止めようとしなかった James たちを再び国王として迎えることはありませんでした。

「私という人間が旧式」と言いながら、古き良き知恵をさりげなく教えてくれるジェムシーナ“Jamesina”伯母さんには、モンゴメリが抱く祖父母や曾祖父母が生きていたハノーバー朝（1714年～1901年）時代への思慕が込められています。

この他にも、ギルバートの女友達クリスチン・スチュアート“Christine Stuart”の苗字が、アン女王のスチュアート家と同じであり、色々な意味でアンをヤキモキさせるように置かれていること、アンたちの二番目の下宿先の持ち主の名前「パティ」が、ブロンテ姉妹の父と長男の名である「パトリック」の女性名の省略形であったり、パティの同居人（姪っ子）の名前がブロンテ姉妹の母と夭折した長女と同じ「マリア（またはマライア）」であったりするなどの、ちょっとした符合が散りばめられています。

Miss パティの語調を強めた次のようなセリフ、

「それはつまり、あんたがほんとに愛するということですか、それとも、ただ、この家のようすが気に入った程度のことですかね？【中略】娘というものは自分の母や主イエスを愛すると言うのと寸分変わらぬ調子で、蕪を愛するなどとは決して申しませんでしたからね。」

『アンの愛情』村岡花子訳 10章より

には、まるでシャーロット・ブロンテの弟パトリック・ブランウェルが、愛していたのに裏切られたロビンソン夫人という既婚女性に対して放ちたかった言葉のようにも受け取れる、ブラックなユーモアが漂っています。

2020年12月7日追記：第2章3節「アン・シャーリーの誕生日」で触れたロイ・ガードナーは、ご存知の通り『アンの愛情』でアンと2年間も付き合った末に振られてしまうレドモンド大学の学友ですが、彼の役回りはそのまま、シャーロット・ブロンテの『シャーリー』でシャーリーに振られてしまうサー・フィリップ・ナナリー准男爵に符合しています。

「行状のすべてにおいてイギリス的な紳士であり、もちろん家系と富においては、彼女が要求する資格をはるかに越えていた」

ナナリー准男爵は、シャーリーの親族からは最も望ましい結婚相手と思われていた人物であり、その点でアンとお付き合いしていたロイと似ています。

ナナリー准男爵もロイ・ガードナーも、「主人公シャーリー」が結婚相手は地位や富では選ばない、ということを表示するための「咬ませ犬的キャラ」でした。

第8章 1891年の夏の夢

第1節 振られた三人男、おじいさんになる

シャーロット・ブロンテはその生涯で三人の男性、ヘンリー・ナッシー、デイヴィッド・ブライス、ジェームズ・テイラーから求婚され、お断りした彼らをモデルとした人物を自身の小説に登場させていたことや、モンゴメリが『赤毛のアン』や『アンの青春』で、彼らをモチーフに物語を綴っていたことは既にも書きました。

モンゴメリは、シャーロットが振った三人の男性からよほどインスピレーションを得ていたようで、『アンの夢の家』では彼ら若者とは「真逆」の、古稀をとうに過ぎた老人が三人登場しています。

それもただ名前を同じにしたのではなく、実在した三人が仮に生きていた場合の年齢が、物語に巧みに織り込まれているようです。

まず、ジェームズ・テイラーはジム船長（ジェームズ・ボイド）として。

「ヨセフを知っている一族」の名付け親である Miss コーネリアが、8章で彼の年齢を「七十六なんですよ。」と言っています。

実在のジェームズ・テイラーは1817年生まれと言われており、『アンの夢の家』8章の時間設定である1891年に彼が生きていれば74歳になっていることから、ジム船長の年齢とほぼ一致しています。

ヘンリー・ナッシーは、ジム船長と「何年も『灰色の鵜丸』と一緒に航海した」ヘンリー・ボロックとして24章に登場。

実在のヘンリー・ナッシーの生誕年は不明ですが、1816年生まれのシャーロットの親友の兄なので、『アンの夢の家』24章の時間設定である1893年にはシャーロットが生きていた場合の77歳より、数年上と考えられます。

76歳のジム船長の「古い仲間」であるヘンリー・ボロックは、実在のヘンリー・ナッシーとほぼ同じ年齢に置かれていることがわかります。

そして、ヘンリーとジム船長が船乗り仲間という設定も、ヘンリー・ナッシーをモデルとした『ジェイン・エア』の St. ジョンと、ジム船長とは「真逆」のような性格だった実在のジェームズ・テイラーが、共に「振られた後、海を渡っている（インドに赴いている）」ことに困んだようです。

さて、三人目の デイヴィッド・ブライスはというと、そのままの名前でギルバートの大伯父デイヴィッド・ブライス 老医師として登場しています。

『アンの夢の家』7章でブライス老医師はアンのことを「あの髪の高い女はどうやら美人じゃないか」と妻に語りますが、シャーロット・ブロンテを元型とするアンを美しいと褒めているところが、いかにもなセリフです。

また、8章の Miss コーネリアのセリフ「もしディブ先生が医者じゃなくて牧師だったらあんな無茶は赦しておきはしませんよ。魂の痛みは胃の痛みほど苦にはなりませんからね。」は、実在のデイヴィッド・ブライスが副牧師であったことを匂わせています。

アンは『アンの夢の家』29章でこの老医師を「八十近くにもなる人」と言っていますが、29章の時間設定は24章と同じ1893年。

1811年生まれとされる実在のデイヴィッド・ブライスは、その年まで生きていれば82歳。他の二人と同様に、『アンの夢の家』の老医師と実在の人物の年齢もほぼ一致しています。

シャーロット・ブロンテに振られた三人の若者を、今度はおじいさんとして『アンの夢の家』の時間軸に埋め込むことができたのは、さぞや愉快的なことだったでしょう。

第2節 夢の家の在りか

”Myself, I think the book is the best I have ever written not even excepting Green Gables or my own favorite 'The Story Girl.' But will the dear public think so? ”

“Selected Journals of L.M. Montgomery Volume II : 1910-1921” p. 222

(拙訳：私としては、『赤毛のアン』やお気に入りの『ストーリーガール』と比べてみても【拙注：『アンの夢の家』は】一番の自信作。でも、世間様はそう思ってくれるのかしら?)

モンゴメリが ”Anne's House of Dreams” (邦題『アンの夢の家』) を「『赤毛のアン』と比べても一番の自信作」と日記に綴っていたことは、まだあまり知られていないようです。

8月の午後、25歳のアンはグリーン・ゲイブルズの屋根裏部屋で、翌月に挙げるギルバートとの結婚式とその後についてダイアナと話しています。

「【前略】あたしの新家庭の場所はすっかり決まったのよ」

「おお、アン、どこなの？　ここから近いところだといけれど」

「近くはないのよ。それが欠点なの。ギルバートはフォア・ウィンズ（Four Winds）港に住むことにしたのよ——ここから六十マイルはなれているの」『アンの夢の家』村岡花子訳 1章より

第4章「原郷の地」では、プリンス・エドワード島のアヴォンリーは、英国スコットランドのボーダーズ地方を流れるツイード川流域の古メルローズのイメージから、モンゴメリが描き出した空想世界であると書きました。

アンとギルバートが新婚時代を過ごすフォア・ウィンズという港も、アヴォンリーから60マイル離れていることから、60マイルは約100km、アヴォンリーの原郷の地・古メルローズから直線距離で北に100kmに位置するスコットランド北東岸のアーブローズという港町が、フォア・ウィンズのモデルではないかと思えます。

既に第4章でご紹介したように、アーブローズはスコットランドが1320年にイングランド王国からの独立を宣言した際、アーブローズ大修道院長がその独立宣言を記した場所であり、フォーファーシャー州（Forfarshire：1928年以降はアングラス州に改名）にあります。

フォーファーシャーのアーブローズは、ウォルター・スコットの初期三部作の一つ“The Antiquary”（邦題『好古家』）の舞台である“Fairport”（フェアポート）のモデルと言われている風光明媚な港町。

架空の“Four Winds”も“Fairport”も、実在の“Forfarshire”と同様「F」から始まる地名になっています。

スコット一流のロマンティックなお話である『好古家』では、主人公オールドバックの住む元巡礼宿泊所だった広い屋敷と、スコットランドでもっとも由緒ある家系の一つであることを誇りにする、自称ジャコバイトのアーサー卿が住んでいるお城が、それぞれ歩いて行ける距離に置かれており、その中間にある海岸の切り立った崖ではアーサー卿の娘の結婚につながるエピソードが描かれています。

モンゴメリはこれと良く似た情景のなかに、アンたちの新居を置きました。

やがてアンとギルバートが長男誕生後に移り住む漁村グレン・セント・メアリと、そこから歩いていける灯台守のジム船長が住むフォア・ウィンズ岬と、その中間にある海岸のクリーム色の小さな家で二人の新婚生活が始まるのです。

フォア・ウィンズは、英国スコットランドのフォーファーシャー州アーブローズのイメージを土台にして、そこに自身がよく知る港の風景を重ねたのでしょう。

(ウォルター・スコットの『好古家』にはこのほかにも、ブロンテ姉妹やモンゴメリの作品と共通するモチーフがいくつかありますが、その具体的な箇所についてはまた別の機会にご紹介できればと思います。参考文献：『好古家』ウォルター・スコット著 貝瀬英夫訳 2018年 朝日出版社)

第3節 船長と教授

次に、『アンの夢の家』のジム・ボイド船長と『ヴィレット』のポール・エマニュエル教授の符合について見ていきましょう。

モンゴメリは、主人公アンにとってのより深いところで繋がっている友人、ジム船長を

「ジム船長には話術家として生れつきの才能がある」

「みんな生活手帳にぎっと書きとめちゃあるが、わしにやそういうことをちゃんと書く才がないでな。きちんとはまる文句にぶつかり、紙にうまくそれを並べられさえすれば大した本をこさえられますがな」『アンの夢の家』村岡花子訳 9章より

という風に描いています。

これはポール・エマニュエル教授の、

「即興の才」を「完全に持っている人」

「ムッシュ・エマニュエルは、叙述家タイプではなかった。しかし私は、彼が、書物にも滅多に見られぬほどの精神の財宝を、無頓着に、何の気なしに、ふんだんにばら撒いて語るのを聞いたことがある」

「それでも、小生にはそれを書き留めるちゅうことができんのだ。」

「機械的な骨折り仕事ちゅうやつが嫌いでね。身をかがめてジッと座っとることが嫌なんだ。しかし性に合った書記になら、喜んで口述できるんだが。マドモアゼル・ルーシーは、もし頼んだら、書き取ってくれるかね？」『ヴィレット』青山誠子訳 第33章より

といった特徴ととても似ています。

『アンの夢の家』20章では、ジム船長の恋人マーガレットとの「五十年以上も」昔の死別が語られますが、同章の設定上の年代は1892年なので、その50年前は1842年。

これは、シャーロット・ブロンテがブリュッセルに留学してエジェ教授と出会った年代と重なります。

彼女の最後の作品『ヴィレット』では、ポール・エマニュエル教授に実在のエジェ教授がほぼそのまま投影されていますが、エジェ教授には死別した婚約者マリーがいたそう。『ヴィレット』のエマニュエル教授にもジュスティーン・マリという死別した婚約者が置かれ、その事情が語られた物語上の時間軸は、シャーロットが留学した年である1842年と推定されます。

つまり『ヴィレット』では、婚約者と死別したエマニュエル教授（エジェ教授を投影）がルーシー（シャーロット自身を投影）と出会ったのが1842年頃に置かれ、『アンの夢の家』ではジム船長がその頃、婚約者と死別したと置かれているのです。

モンゴメリはジム船長にエマニュエル教授を色濃く投影しつつ、アンとの間に50歳ほどの年齢差を置くことで、恋愛感情を抜いてなお一層深く繋がる友人として描いたことが、この時間設定の符合から見て取れます。

第4節 ヴィジョンが見える人

さて、『赤毛のアン』から『アンの愛情』までのアン・シリーズでは、マシュウ・クスバート、ダイアナ・バーリー、Miss バーリー（ダイアナの大伯母）、アラン夫人、ステイシー先生、Miss ラベンダー、ポール・アーヴィング、ポールの父（Miss ラベンダーの夫となる）、この8人がアン・シャーリーのキンドレッド・スピリッツとして描かれました。ところが、『アンの夢の家』に登場するキンドレッド・スピリッツは、このような「気が合う人々」とは少し異なるようです。

その代表格であるジム船長は、若い時分に体験したある不可思議なヴィジョンについて語った際、真剣に耳を傾けるアンに「ヨセフを知っている一族」同士であると告げます。

「もしある者がこちらと意見が一致し、物事についてほぼおなじ考えを持ち、冗談口にも好みがあつたとしたら、その人間はヨセフを知ってる一族に入る」『アンの夢の家』村岡花子訳 7章より

というジム船長の言葉から、「ヨセフを知っている一族」とはキンドレッド・スピリッツのようなものと受けとめるアン。

新居の過去の住人である Miss エリザベス・ラッセルにキンドレッドを感じたアンは、それとは異なる強さで、丘の上に身を隠すように離れ住むレスリー・ムアに惹かれてゆきます。

物語が進んでいくと、レスリーの未来の夫になるオーエン・フォードが登場し、“kindred infinite”（同類の無限）についてアンに語るのですが、これまでの「キンドレッド・スピリッツ」とは似ているようで、どこか異なる「ヨセフを知っている一族」とはどのような概念なのでしょう。

ヨセフは、旧約聖書の「創世記」に登場する「主の恵みと共にある者」。

「姿がよく、顔が美しかった」ヨセフは、既婚女性から何度誘われてもそれを拒んだ人物として、西欧社会では「貞節を守る」象徴として知られています。

モンゴメリは、旧約聖書の「出エジプト記」の冒頭にある「ヨセフのことを知らない新しい王」という記述をもじって、“the race that knows Joseph（ヨセフを知っている一族）”というユーモラスなワードを創ったことが推察されます。

「溺死した恋人に五十年間、誠を尽くしてきた老いたる」独身者ジム船長は、まさにヨセフのように貞節がなんたるかを知っている人物と言えますが、私にはそのことだけが「ヨセフを知っている一族」の条件であるとは思われません。

それよりも、アンの「小さな家」の先の住人 Miss エリザベス・ラッセルが、「昔から心霊を見る習慣があった」19世紀のロマン主義詩人、ジェイムズ・ラッセル・ローウェルと同じ Russell という名であること。

(2021年7月14日追記：『赤毛のアン』2章冒頭2行の詩は、ジェイムズ・ラッセル・ローウェルの『サー・ローンファル』からの引用です。(『赤毛のアン』山本史郎訳注釈 p.508 原書房 2014年改訂版))

そして、ジム船長の生活手帳を書き起こして本にしたオーエン・フォードが、ウォルター・スコットと同時代の社会改革者で晩年に心霊主義に傾倒していたロバート・オウエンと同じ Owen という名であるあたりに、ジム船長の昔話に漂う不思議な空気と通底するものを感じます。

聖エイダンのヴィジョンを見た古（いにしえ）の聖クスバートのように、そこにはいないはずの人やものが見える—いわゆる“**Vision**（ヴィジョン）”が見える人がこの世には存在していて、そんな不思議な能力を「人知れず」持っている人物を、疑うことなくそのまま受け入れることができる人々が「ヨセフを知っている一族」ということではないでしょうか。

第5節 kindredspirits とヨセフを知っている一族

モンゴメリが『赤毛のアン』で描き出した「キンドレッド・スピリッツ」——村岡花子さん訳では当初、「気が合う」「仲間」「心が通じ合ってる」と訳され、シリーズ2巻目の『アンの青春』の途中から「同類」と訳されるようになった言葉——は、シャーロット・ブロンテのオマージュと思われます。

もちろん、ロマンティシズムにカテゴライズされる詩人たち——トマス・グレイやジョン・キーツが“kindred spirit(s)”という言葉に詩に詠んでおり、ブロンテ姉妹もそこから想起したものを自らの経験に映し出して作品を描いたのでしょう。

エミリー・ブロンテは詩の中で、「親族」という意味で“kindred”のワードを用いています。

アン・ブロンテは2作目の『ワイルドフェル・ホールの住人』（1848年出版）で、主人公ヘレンに対して物語の語り手でありもう一人の主人公であるギルバートが“kindred spirits”（同じ思いを持つ魂）と伝えています。

シャーロットは、出世作『ジェイン・エア』（1847年出版）で“kindred”の文字を6回、そのほとんどを「親戚」の意味で使っていますが、終盤の33章ではジェインの台詞として次のように用いています。

“I want my kindred: those with whom I have full fellow-feeling.”

（拙訳：欲しいのは身内、心から同胞と感じられる人。）

『シャーリー』では“kindred”という言葉は使われていませんが、『教授』では4回、「血統」や「家族」の意味で使われています。

そして最後の作品となった『ヴィレット』（1853年出版）では、計3回。

最初は「親戚」の意味で用いられますが、終盤の35章では次のように使われています。

”But a close **friend** I mean—— **intimate** and **real** —— **kindred** in all but blood.”

（拙訳：だが、わしは親友のことをいっているのだ——親密な、本当の友達——血の繋がりの他は何もかもピッタリ合っている人だ。）

このポール・エマニュエル教授がルーシーに伝えた台詞にある **friend**、**intimate**、**real**、**kindred** のワードはそのまま、『赤毛のアン』でアンが次の様に用いています。

”A bosom **friend** —an **intimate friend** , you know—a **real ly kindred** spirit to whom I can confide my inmost soul”

「腹心の友よ—仲のいいお友達のことよ。心の奥底をうちあけられる、ほんとうの仲間よ。」

『赤毛のアン』村岡花子訳 8章より

しかしモンゴメリの描いた”kindred spirits” は、ダイアナやマシュウ、アラン牧師夫人、ポールなど会ってすぐに心が通じ合う人たち全てを指しており、「ぼっちじゃないわ。この世界にたくさんいる」と置かれた点が、想い人ただ一人のことを指していたシャーロットやアン・ブロンテの”kindred (spirits) ”とは異なる点です。

それが、『アンの夢の家』ではジョン・セルウィン先生やジム船長、Miss エリザベス・ラッセル、Miss コーネリア、オーエン・フォードなど「今はもう、あるいはまだそこにはいない人々」を普通に身近に感じることができる人、そうした能力をひっそり持つ人を自然に受け入れることができる人たちへと変化します。

そして、モンゴメリの「ヨセフを知っている一族」という概念で、キンドレッド・スピリッツはより深められたのです。

繰り返しになりますが、モンゴメリは1913年7月末のシャーロット・ブロンテの「4通の手紙」というビッグニュースによって彼女のエジェ教授への恋心を知った上で、「エジェ教授が投影されたエマニュエル教授」が元型であるジム船長を、「シャーロット」を元型としているアンの想い人ではなく「ヨセフを知っている一族」、深化したキンドレッド・スピリッツと置いています。

アン・シリーズでは一貫して、シャーロットとその作品を熱烈にオマージュしているモンゴメリですが、キンドレッド・スピリッツは恋愛や結婚の対象ではないという「一線」は譲れなかったようです。

そこで気になるのが、モンゴメリ自身の kindred spirits。

『赤毛のアン』の出版が決まる少し前に、文通相手のマクミランに宛てた手紙にはこう書かれています。

「ええ、結婚生活においては、類似点が見つかるのは望ましくないというあなたの意見に

賛成です。頭で考えるときには、類似点がなければならぬと思うでしょうが、現実はまだ違います。わたしの意見では、友情には似ていることが当然必要です。でも、恋愛には似ていないことが是非とも必要なのです。もちろん、わたしは結婚したことはありませんから、この問題についてのわたしの結論が絶対的なものだとはみなすことはできません。でも、観察したことから判断して、わたしは次のような結論に達したのです—わたしが知っている最も幸福な結婚をしている幾組かのカップルはお互いに全然似ていない者同士なのに、非常によく似た者同士のカップルの中には不幸な結婚生活をしている人たちがいる、と。こういうことになるのは、お互いに友情関係ではとてもウマが合うことに気付いた二人が、一足飛びに、結婚生活でも全く同じであろう、いや、一層うまくゆくだろうとの結論に飛びつくからだと思います。物の見方が似ているために、結婚という親密な関係に入ると、お互いにじっくりゆくかわりに、衝突してしまうのです。」(『モンゴメリ書簡集 I G.B. マクミランへの手紙』ポールジャー、エパリー編宮武潤三、宮武 順子共訳 篠崎書林 1907年4月1日の手紙より抜粋)

この手紙が書かれた時、モンゴメリはまだユーアンと結婚していません。

「恋愛には似ていないことが是非とも必要」「わたしが知っている最も幸福な結婚をしている幾組かのカップルはお互いに全然似ていない者同士なのに、非常によく似た者同士のカップルの中には不幸な結婚生活をしている人たちがいる」とはっきりと書いているモンゴメリにとって、この4年後に結婚するユーアンは「ヨセフを知っている一族」ではなかったはずで

ところが、1922年のマクミラン宛の手紙には、夫ユーアンがモンゴメリの kindred spirits たちと一緒に森の中でキャンプしている白昼夢が綴られています。

この夢には何が表象されているのでしょうか。

結婚した後で、ユーアンは「ヨセフを知っている一族」になったということかもしれません。

第一次世界大戦で自分の教区の住人に多くの戦死者がでた辺りから、彼の精神は病み始めたと言われて

います。戦争で亡くなった「今はもうそこにはいない人々」の魂を感じているような言動が、ユーアンに現れ始めていたのかも知れません。

しかし、こう考えることは出来ないでしょうか。

夫ユーアンが白昼夢に登場したというのは、本当に登場した別の「ヨセフを知っている一族」をカモフラージュするための嘘だった、と。

第6節 ウィルが「盗んだ」指輪

モンゴメリは16歳の一年間を、再婚した父のいるサスカチュワン州プリンス・アルバートで過ごしましたが、その時ウィリー・プリチャード（ウィル）と出会います。

Will(ウィル)は、モンゴメリが14年後に描き出すアン・シャーリーのような「赤毛で緑の目」だったそうですが、ギルバートのように「歪んだ口元」をしていました。

モンゴメリは『赤毛のアン』の15章と25章で、ダイアナに計3回、ギルバートのことを”Gil”（ギル）という愛称で呼ばせていますが、その”Gil”（ギル）がWill（ウィル）のフランス的名である”Guille”（ギル）と同じ音であることは、以前『ブロンテになりたかったモンゴメリ』で指摘した通りです。（『ヨーロッパ人名語源辞典』梅田修著大修館書店 p. 240 参照のこと。）

ウィルと彼の姉ローラ・プリチャードと三人で、本を読んで話し合ったり遊びに出かけたりするうちに、ウィルと特別な気持ちを抱き合うようになったモンゴメリですが、義母と上手くいかずにプリンス・エドワード島へ戻ることとなります。

ウィルと離れ離れになる1891年8月26日に、ウィルから手渡された手紙で「君を愛している。これからも」と告白されたことが、当時の日記に綴られています。

ウィルはその6年後、1897年4月2日にインフルエンザに罹って亡くなりますが、彼から告白された**1891**年の晩夏を、モンゴメリは『アンの夢の家』でギルバートとアンが結婚式を挙げる**9**月の時間軸に重ねました。

大学を出てすぐの結婚ならば、物語の時間軸上では1888年の結婚となったところを、そこに「3年間の文通」を挿入することで、1891年の結婚としたのです。

その上で、

「できればいつ、どこであたしは式を挙げたいかわかりになる？ 夜明けなの—壮麗な日の出、庭にはばらが咲き匂う六月の夜明けなの。」『アンの夢の家』村岡花子訳3章より

と、式直前にも関わらずアンに言わせているモンゴメリ。

ダイアナもフィリパも6月の結婚式だったのに、アンの結婚が**9**月だったのは、モンゴメリ自身がウィルの**8**月末の告白を受け入れたイメージの中に置いたものだったからに違いありません。

大好きなシャーロット・ブロンテが秘密の心情を小説に描き出したように、モンゴメリはウィリー・プリチャードとの秘密の思い出を、『アンの夢の家』の時間軸に埋め込んだのです。

アンにとってギルバートは kindred ではない、と置かれていることから、ウィルもモンゴメリにとっての kindred ではなかったということになるのでしょうか。

しかし、モンゴメリとウィルとの関係は、彼の死で終わりを迎えたわけではありませんでした。

ウィルの死から **20** 年後に出版された『アンの夢の家』を、モンゴメリはウィルの姉ローラ・プリチャードに献呈しています。

さらには、ウィルと出会い、そして別れた 1891 年から 39 年後には、ローラ・プリチャードを訪ねてもいます。

モンゴメリは、シャーロット・ブロンテの『ジェイン・エア』の様に、遠くにいるウィルと感応しあっていたからこそ、彼の姉との現実世界での関係も絶やすことなく続けていたのかも知れません。

そうだとしたら、いくら望んでも結婚相手にはなり得ないウィルは、まさしくモンゴメリの **kindred spirits** の定義の適格者であったと言えるでしょう。

モンゴメリはローラ・プリチャードと再会し、ローラとウィルが昔住んでいた家を共に訪ねたときのことを綴った 1930 年 10 月 12 日の日記で、

“Will was with me, a jolly, **Josephian** comrade: ”

(拙訳：陽気なヨセフの仲間のウィルが私のそばにいた。)

と記し、合わせてウィルとローラと共に過ごした 1891 年の数日間の思い出を次のように書いています。

“Anyhow we held hands and he”stole" the little ring I wore—the little ring I wear yet—the ring that is never off my hand day or night. It is an amazing thing about that ring—it was a mere thread of gold when Aunt Annie gave it to me when I was twelve—it was a still slenderer thread when I gave it to Will—and when it came back to me after his death. It has never been off my finger since. And it has never worn out. I would not know my hand without it. I want it on my hand when I die—when I am buried. It is a symbol of something—I hardly know what—but something old and sweet and precious and forever gone. ”

”The Selected Journals of L.M.Montgomery VOLUME IV: 1929-1935” メアリー・ルビオ&エリザベス・ウォーターストン編 P. 80 より

(拙訳：手を握り合った拍子にウィルは私が身につけていた小さな指輪を「盗んだ」—その小さな指輪を私は今もまだはめている—昼だろうが夜だろうがその指輪をつけたまま。信じられないくらい大切なもの—アニーおばさんから十二歳でもらった時にはただ

の金色の糸だったのに。ウィルにあげた時にもそれはまだ細い糸でしかなかったのに——ウィルが亡くなって指輪が私の手元に戻ってきてからは、ずっと外したことがない。それは色褪せない。それ無しではいられない。死ぬ時をはめていたい。埋められるその時まで。それは何ものかの象徴——それがなんであるのかはわからない——思い出の、甘く大切な、永遠に去ってしまったもの。)

”Josephian comrade” と日記に書かれたウィルは、やはりモンゴメリにとっての「ヨセフを知っている一族」だったのです。

そして、ずっと一つの指輪で繋がっていたのです。

第9章 操作された時間軸（タイムライン）

第1節 スペイン風邪がさせた決心

1913年7月末にシャーロット・ブロンテの禁断の恋文のニュースを知った後、モンゴメリは『アンとギルバートの結婚』『アンとギルバートの結婚』の4作品をほぼ2年おきに世に出します。

アンとギルバートが婚約する『アンとギルバートの結婚』から始まり、第一次世界大戦が終結して恋人のケネスがリラのもとに帰ってくる『アンとギルバートの結婚』で終わるこの4作品を生み出したのは、シャーロット・ブロンテのエジェ教授への手紙であったことは間違いないでしょう。モンゴメリは、彼女が22歳の時にインフルエンザで亡くしたウィルへの思慕を、物語の中でアンがギルバートと結ばれることで成就させているのです。

アンとギルバートの結婚が1891年、すなわちウィルから告白された年に設定されたことも当然のことと言えます。

しかしモンゴメリは、シャーロット・ブロンテが主人公シャーリーとルイ・ムア、もう一人の主人公キャロラインとロバート・ムアの二組の合同結婚式をラストに描いた『シャーリー』へのオマージュとして、メレディス牧師とローズマリー、ノーマン＝ダグラスとエレンの二組の合同結婚式で締めくくった『虹の谷のアン』を書き終える頃までは、アンとギルバートの結婚の年を明確化することを避けていました。

それどころか、誤誘導のための仕掛けさえ置いています。

『アンとギルバートの結婚』のなかで、アンとギルバートの結婚から1年後に生まれたジョイスはその日の夜に亡くなってしまい、その1年後つまり二人の結婚から2年後にジェムを誕生させているモンゴメリは、ジェムの生まれた年にカナダ自由党の18年ぶりの政権奪還というちょっとした「史実」を置いています。

このカナダ自由党の大勝は1896年に実際にあった出来事であり、この年にジェムが生まれたと読者が受け取ることで、アンとギルバートの結婚をその2年前の1894年と計算できるように誤誘導したのです。

自分の日記は必ず世に出ると信じていたモンゴメリは、そこに綴られたウィルとの思い出がアンとギルバートの物語の時間軸と符合することに気づかれないよう、このような工夫を施したと思われる。

しかしその後、ある悲劇が彼女の気持ちを変えました。

『虹の谷のアン』を書き終えてほどなくして、世界的に猛威をふるったスペイン風邪（インフルエンザ）のために、親友ともいえる間柄であった9歳年下の従姉妹、フレデリカ・キャンベルが亡くなります。

1919年1月末のことでした。

またしても大切な人をインフルエンザに奪われたモンゴメリは、アンとギルバートの物語に託したものが何であるのかを、もはや隠して置きたくない心境になったのでしょう。1921年に出版された『アンの娘リラ』を、モンゴメリは1914年6月28日日曜日に発生したサラエボ事件を報じる新聞記事から始めました。

そこにジェムとリラの年齢を明記することで、この世界史の重大事件があった年月日を基準としてアン・シリーズを流れる時間を逆算すれば、『赤毛のアン』から始まり『アンの娘リラ』に至るまでの物語を形作る、様々な出来事がいつのことであったのかを知ることができるようにしたのです。

**『アンの娘リラ』で初めて世界史レベルの史実とリンクした時間軸を挿入したことで、『アンの娘リラ』までのタイムラインが明確化し、またそれによって『アンの夢の家』に埋め込まれたウィルとの思い出の年代を確定したモンゴメリ。

彼女にそう決心させた従姉妹のフリード（フレデリカ）・キャンベルに、『アンの娘リラ』は献上されています。**

第2節 『アンの幸福』で失われたもの

『アンの娘リラ』で一旦アン・シリーズを描き終えたモンゴメリは、1921年8月にエミリー・バード・スターの物語を執筆し始めます。

エミリーについては10年前から構想していたことが、当時の日記に書かれています。

”my heroine is Emily, just as Anne was Anne. She has been ‘Emily’ for the past ten years during which time I have been carrying her in my mind, waiting for the time when I could put her into a book.”

(拙訳：アンがアンであったように、新しいヒロインはエミリーである。彼女はこの十年間、私の心の中で生まれ、本になる時を待っていた。)

1921年の10年前といえば『アンの青春』を描き終えてしばらくたった頃。
『アンの青春』の後1915年に出版される『アンの愛情』までの間、モンゴメリはアンの
その後の物語とエミリーの新しい物語を同時に練っていたのかも知れませんが、アンの
お話に終止符を打ったつもりだったかも知れません。

1921年の10年前は1911年。

その年の7月に結婚したモンゴメリが日記に綴った新婚旅行の記述からは、それがシャー
ロット・ブロンテの感性への共感だけでなく、自分とは異なる点を確認する旅であった
ことが伺われます。

例えばウォルター・スコット邸への道中の景色に魅了された一方で、シャーロットがと
ても喜んでいたエディンバラの都市にはその陰鬱さにうんざりしたことや、アーガイル
地方の美しさやキリミュアの田舎の光景に感動や親しみを覚えるものの、プリンス・エ
ドワード島の風景の方がずっと好みであったことが、文章の合間から伺われます。

そしてエミリー・シリーズの構想が前述したように1911年に始まっているのは、新婚旅
行を境にして、シャーロットを模したアン・シャーリーの造形をこれ以上描くよりも、田
舎を好むなど多くの面で自分と似ているエミリー・ブロンテをモデルにした物語を描き
たいと思い始めたからかも知れません。

いずれにせよ、1913年にシャーロット・ブロンテの手紙のニュースを知った後でモンゴ
メリが綴り始めたのは、エミリーではなくアンの物語でした。

『アンの愛情』『アンの夢の家』『虹の谷のアン』『アンの娘リラ』の4作をほぼ2年おき
に描いた彼女は、『アンの娘リラ』でアン・シリーズにひと区切りを付けた後で、エミ
リー・シリーズ3作や『銀の森のパット』シリーズ2作など、シャーロット以外のブロ
ンテからネーミングされたシリーズ物を描きます。

ところが『アンの娘リラ』から15年後、なぜか再びモンゴメリはアン・シリーズに戻
っているのです。

それも、時間を巻き戻す形で。

モンゴメリがアン・シリーズを再開した作品『アンの幸福』には、アン・シャーリーが
ギルバートと婚約してから結婚するまでの3年間の文通が描かれています。

書簡形式で進むその物語の書き出しは「九月十二日曜日」。

アン・シリーズの中で日付と曜日の記述があるのはこの箇所だけです。

実はこの日付と曜日から、アンの物語の中に埋め込んだモンゴメリの「もうひとつの秘
密」を知ることができるのです。

これまでの説明でお分かりの通り、アンの結婚は 1891 年の出来事です。
ところがその 3 年前の 1888 年のカレンダーを調べてみると、その年の「9 月 12 日」は「水曜日」。

『アンの幸福』の書き出しにある「月曜日」ではありません。

それではと、その前後の年のカレンダーをみると 1887 年の 9 月 12 日が月曜日だったのです。

この一年のズレはなぜ生じたのでしょうか。

モンゴメリが適当に設定した「九月十二日月曜日」が、たまたま一年前に実際に存在していたのでしょうか？

そうだとしたらなぜモンゴメリは、この日だけにわざわざ曜日を付したのでしょうか？

私の推理はこうです。

***モンゴメリは、アンを 53 歳まで歳を重ねさせて一旦書き終えたアン・シリーズを、ある意図を持って再開した。

*再開する物語の始まりを、現実存在した 1887 年 9 月 12 日月曜日とし、それがアンとギルバートの結婚の 3 年前であると設定することで、既に世に出ているアン・シリーズの時間軸を修正しようとした。

*そうすることで 19 年前に執筆した『アンの夢の家』に埋め込んだ、自分自身のウィルトの恋の思い出を隠蔽しようとした。**

つまり、アンの結婚の年を 1891 年ではなく 1 年前倒しの 1890 年となるように、誤誘導の操作をしたと考えられるのです。

例えば、『アンの幸福』の次に書かれた『炉辺荘のアン』のラストでは、「結婚 15 周年」を迎えたアンとギルバートが翌年の 2 月にロンドンで開かれる大医学会議に合わせて、ヨーロッパへ第二の新婚旅行に出かける計画を立てるといふエピソードが描かれています。

これは、モンゴメリが 20 年前に書き終えている『虹の谷のアン』の物語の冒頭の、5 月に夫妻が 3 ヶ月に及ぶヨーロッパ旅行から戻ってきたところへと途切れることなく繋げるためのもの。

しかし『アンの娘リラ』までのタイムラインを丁寧に辿れば、『虹の谷のアン』でアンとギルバート夫妻がヨーロッパ旅行から帰還するのは 1906 年の 5 月。(第 2 章 2 節参照のこと。)

アンが結婚した年月は 1891 年 9 月なので、「結婚 15 周年」を迎えるのは 1906 年の 9 月、つまりアン夫妻がヨーロッパから戻ってきた後であるはずなのに、『炉辺荘のアン』のラストの 1905 年の秋に置かれてしまいました。(第 11 章 1 節のエピソード表を参照のこと。)

そもそも『虹の谷のアン』のどこにも「結婚 15 周年」を伺わせるエピソードは描かれて

いませんが、そのことを利用して、アン・シリーズの年代操作を行ったのでしょう。

アン・シリーズのタイムラインを1年前倒しさせるための辻褃合わせとその綻びは、ジェムの年齢を通して見ることができます。

『アンの子供たち』までのタイムラインでは1893年生まれであるはずのジェムの年齢が、『炉辺のアン』では1892年生まれとなるように置かれています。

具体的には、リラが生まれた年にジェムは7歳になったと記述しているのです。

本稿第2章2節にある通り、『アンの子供たち』にはサラエボ事件があった1914年6月末にジェムが21歳になっていることと、その一月後にリラが15歳になることが描かれています。

つまり、ジェムとリラは6歳違い（ジェムの誕生日からリラの誕生日の間だけ7歳違い）の兄妹なのですが、『炉辺のアン』では7歳違い（上記の間だけ8歳違い）となっているのです。

これは、『アンの子供たち』の冒頭の日付と曜日の記述から導き出されるアン・シャーリーの結婚年が1891年ではなく1890年と1年前倒しになるために、ジェムの生まれた年も1年早まってしまった結果です。

こうした強引なタイムラインの操作の結果、シャーロット・ブロンテやその家族の誕生日との符合がアンの子供たちから失われてしまいました。

シャーロット・ブロンテへのオマージュを彼女の年譜ごと物語に織り込み、アンの子供たちの「1891年9月の結婚」というパラレルワールドに「1891年8月26日のウィルの告白」を密かに埋め込み現実を塗り替えたモンゴメリが、晩年になってその大切な時間軸を壊したのは何故か。

その理由を知る重要な手掛かりは1935年にあります。

この年、モンゴメリは英国から大英勲章を授与されているのです。

勲章の知らせが同年の5月23日に届き、9月の初めに授与式が執り行われたことが日記に綴られているのですが、『アンの子供たち』が描き始められたのは授与式前月の8月12日でした。

大英勲章という名誉は、モンゴメリにとって何のものにも変えられない喜びであったであろうことは想像に難くありません。

しかしそれ以上に、今やカナダはおろか心の祖国である英国を代表する作家となったモンゴメリは、夫とは違う男性への思いを物語の中に埋め込んだことに気づいた世間から、「不実を働いた」とゴシップネタにされるのではないかという怖れを抱いたのではないのでしょうか。

もちろんその証拠は日記の中にしかなく、それを焼いてしまえば永久に気づかれることはありません。

しかし、日記が消滅することは自らが殺されるに等しい、そう日記に綴っていたモンゴメリ。

いづれ日記が公開されることを望んでいた亡き母の意向を汲み、次男スチュアートが1981年にゲルフ大学に寄贈しています。

そんな彼女だからこそ、1913年に公開されたシャーロット・ブロンテのエジェ教授への手紙が、世間からどのように受け止められたのかを思い起こし、アン・シリーズの時間軸の改竄を思いついたと考えられるのです。

実はモンゴメリの改竄は、これが初めてではありません。

『アンの家』の執筆が終わった後の時期である1917年の6月～11月に、トロントの”Everywoman’s World”という雑誌に自伝的連載エッセイを寄稿しているのですが、ここでは『赤毛のアン』を1904年の春に描き始め、描き終えたのは1905年の10月と書いています。

その一方で日記には、創作ノートに『赤毛のアン』の原点となった書き込みをしたのが1895年、『赤毛のアン』の執筆を始めたのが1905年5月と書かれてあり、モンゴメリが自身の創作活動をシャーロット・ブロンテの創作活動の流れになぞらえて進めていたことは第1章4節に書いた通りです。

日記に書いてある時間の流れを1年前倒しにしてエッセイを綴ったのは、ブロンテを意識していたことを伏せて、『赤毛のアン』のオリジナリティを強調したかったからかも知れません。

ところがそんなエッセイの後に描いた2作品、『虹の谷のアン』『アンと娘リラ』でもシャーロット・ブロンテへのオマージュは続いています。

1935年の大英勲章の受賞が引き金となったアン・シリーズの時間軸の改竄は、『アンの家』に埋め込んだウィルの思い出の年代的符合を無かったことにする試みであったと推察されますが、それは同時にアン・シリーズの細部に埋め込まれたシャーロット・ブロンテやその家族の誕生年との符合を無くすためでもあったでしょう。

『赤毛のアン』とそのシリーズは何者にも依らず自分自身で創造した産物である、との強烈な自負心から、心の底から湧き上がる創作の動機そのものを抹消してしまったモンゴメリ。

これも、勲章という名誉がもたらした功罪だったのかもしれない。

モンゴメリの連載エッセイは、”The Alpine Path: The Story of My Career（邦題『険しい道』）”という自伝本として彼女の死後、1974年に出版されています。

*なお、英語版ウィキペディア Anne of Green Gables サイトでは実際に『アンの幸福』の誤誘導に基づいた算出が行われてしまっている為、アンが最初に物語に登場してから結婚するまでのタイムラインが1年前倒しになっています。(～2021年3月現在。)
ブロンテとアン・シリーズの名前やエピソードの符合については近年ようやく注目され始めているようですが(2017年のNetflixのドラマ『アンという名の少女』など)、両者の年代の符合については、まだ英語圏では気づいていないようです。

*英語版 Wikipedia について：2021年10月12日追記

"Anne of Green Gables" の英語版 Wikipedia を確認した所、Lucy Maud Montgomery's books on Anne Shirley という一覧表に、2021年3月にはあったある項目が無くなっていることに気が付きました。

1) 2021年3月まではあった、アン・シリーズの "Date published (出版年)" や "Anne Shirley's age (アンの年齢)"、"Timeline year (物語の年代)" の3項目が、"Date published (出版年)" と "Timeline year (物語の年代)" の2項目だけになった。

2) このうち、"Timeline year (物語の年代)" の内容が、3月まであった "Anne Shirley's age (アンの年齢)" として整理されていたものに置き換わった。つまり、3月まで "Timeline year (物語の年代)" という項目で書かれていた内容が消去されている。

3) その他のアン・シリーズに関する英語版 Wikipedia 各サイト内の一覧表 Lucy Maud Montgomery's books on Anne Shirley では、上記の "Date published (出版年)" と "Timeline year (物語の年代)" の内容が、"Date published (出版年)" と "Anne Shirley's age (アンの年齢)" として整理されている。

この「変化」により、英語版 Wikipedia を参考にしようとする、かえって混乱をきたすという状況になっているため、改めて次のような説明を付け加えておきます。

1) 2021年10月12日現在、英語版 Wikipedia "Anne of Green Gables" の一覧表にある "Rilla of Ingleside (アンの娘リラ)" の「アンの年齢」は「49歳-53歳」となっています。

しかし、同表の "Anne's House of Dreams (アンの夢の家)" にも「25歳-27歳」とある通り、アンが27歳の年に長男ジェムが生まれています。

そしてジェムが21歳になる年に、第一次世界大戦が始まり、アンはその時「27歳+21年=48歳」です。

従って、第一次世界大戦の年からスタートする "Rilla of Ingleside (アンの娘リラ)" の「アンの年齢」は「48歳-53歳」(「物語の年代」としては1914年~1919年の6年間)となります。

2) 物語にある通り、“Rilla of Ingleside (アンの娘リラ)” のスタートする 1914 年の 15 年前に、末娘のリラが生まれています。

従って、リラの誕生が描かれる “Anne of Ingleside (炉辺荘のアン)” の最初の年の、「アンの年齢」は「48 歳 - 15 年 = 33 歳」。

つまり、“Anne of Ingleside (炉辺荘のアン)” の「アンの年齢」は「33 歳 - 39 歳」(1899 年 ~ 1905 年の 7 年間) となります。(“Anne of Ingleside (炉辺荘のアン)” の年代考察の詳細は 11 章 1 節をご参照ください。)

しかしながら、英語版 Wikipedia では当該箇所が「34 歳 - 40 歳」となっていてしまっているのは、“Anne of Ingleside (炉辺荘のアン)” のラストに描かれたアン夫妻の「結婚 15 周年」の描写から、ラスト時点の「アンの年齢」を「25 歳 + 15 年 = 40 歳」と単純計算したものと考えられます。

そして、“Anne of Ingleside (炉辺荘のアン)” の 7 年間の始まりの年にリラの誕生が描かれているので、アンの年齢を逆算して物語のスタート時点では 34 歳であるとしてしまったのでしょう。

また、リラが 15 歳になる年に第一次世界大戦が始まることから、その時の「アンの年齢」は「34 歳 + 15 年 = 49 歳」となってしまったようです。

本稿第 9 章 2 節でご説明した通り、モンゴメリが晩年に仕掛けた「誤誘導」に気づくことができなければ、このような間違った「アンの年齢」が導き出されます。

英語版 Wikipedia の “Anne of Green Gables” とそのシリーズの各サイトでは、アンとリラの年齢のみでシリーズ全体の「アンの年齢」の算出が行われており、各物語における「ジェムの誕生年のズレ」が全く考慮されていません。

そのため、「結婚 15 周年のズレ」にも気付けないのです。

あるいはこう考えることも可能です。

つまり、英語圏でも「結婚 15 周年」にズレがあることに気付いた。

だから当初あった “Timeline year (物語の年代)” の項目内容を表から消去し、「わかりやすいところだけを残した」ということなのかもしれません。

第10章 それでも見つけてほしいもの

第1節 Willow と Will

時間軸の操作が行われている『アンの幸福』の原題は "Anne of Windy Willows" 。
米国では "Anne of Windy Poplars" (Poplars = ポプラ) に変更されました。
この経緯について、モンゴメリはペンフレンドのマクミランにこう綴っています。

「わたし自身がつけた題は『風そよぐ柳荘のアン』というものでした。でもストークス社側は、この題ではすぐさまケネス・グレアムの動物童話『風そよぐ柳の木立』を連想してしまうという考えでした（ある年のクリスマスにあなたが送って下さったこの本を、わたしは再三再四読み返し、そのたびごとに前回にも増して楽しんだものでした）。そんな考えは全くのこじつけにすぎないと思いましたが、《柳》のかわりに、《ポプラ》にしたらどうでしょう、と提案いたしました。でも、ハラップ社側はこの意見をきっぱりと拒絶し、《柳》のままでいいと言い張りました。ハラップ氏の言うところでは、英国人はポプラについてほとんど何も知らないが、柳のことは知り尽くしている、というわけです!!
それで一件落着。」『モンゴメリ書簡集 I G.B. マクミランへの手紙』宮武潤三・順子訳 p.222~223 篠崎書林

英国でハラップ社から出版された "Anne of Windy Willows" と、米国でストークス社から出版された "Anne of Windy Poplars" は、題名だけでなく内容にも異なる箇所があります。

このあたりの事情についても、マクミラン宛の手紙から引いてみましょう。

「ストークス社の出版顧問は、アンが墓地を散歩するシーンと、後にアンが《トムギャロン館》を訪問するシーンとにでてくるエピソードのいくつかを「あまりにも無気味」だから、削除したほうがよいと言ってきました。で、その意見に従って削除したわけです。英国版はいつもアメリカ版をもとにして印刷されていたので、この本もそうなるだろうと思い、削除したことをハラップ社に伝える必要はないと思っていました。ところが、ハラップ社は初めて独自に活字を組んだのでした。というわけで、英国版ではその「無気味なもの」がそっくりそのままはいつているわけですが、それでは具合が悪いと思った人はいないようなのです。それどころか、滑稽なことに、その断片のひとつが『ニューズエージェント』紙の記事に引用されていて、この本における面白い点のひとつだということです!!!」『モンゴメリ書簡集 I G.B. マクミランへの手紙』宮武潤三・順子訳 p.222

篠崎書林

村岡花子さん訳の『アンの幸福』は英国版を元にしていて、米国版で削除されたお墓や死、闇といった情景が描かれた箇所を読むことができます。

そこには恐怖や怪奇といった印象は全くなく、「この世界と向こうの世界」の境を越えた交信に憧れるモンゴメリの心象世界が垣間見られます。

アンからギルバートへの手紙だけで綴られ、ギルバートからの返信は一切描かれていない『アンの幸福』は、まさにモンゴメリからウィルへの手紙そのもの。

もちろんそれは、一方通行ということではありません。

読者には示されていないけれど、ギルバートからの返事は確かにアンのもとに届いていたのであり、だからこそ二人は後に結婚して幸せな家庭を築くのです。

そしてモンゴメリもきっと、彼女にしかわからないウィルからの返信を受け取っていたに違いありません。

柳の枝を静かに揺らす風のようなウィル=" Windy Will “の気配に包まれて、モンゴメリは”Anne of Windy Willows" (邦題：アンの幸福) を綴ったのでしょう。

向こうの世界への想いを一層募らせていった彼女が、ウィルへの想いを昇華させるためにアン・シリーズを描き続けたという事実を世間の目から隠すために、時間軸の操作を仕掛けた『アンの幸福』。

Wikipedia の「アンの幸福」の記事にも、

「原題にある「Willow」は柳という以外にも未亡人という意味があり（恋人を弔うの意味である wear the willow という成句がある）、作中には多くの未亡人が登場する。」

とあるように、”Anne of Windy Willows" には二重三重の意味があることは間違いないでしょう。

こうしてみると、『赤毛のアン』でアンがネーミングした湖ウィローミアも「ウィルの湖」であったことに気づきます。（“mere” は詩語で「湖、池」の意味。）

モンゴメリは 1917 年に連載された自伝エッセイを書く際に、”willowmere” を “Wiltonmere” と誤記していることが自伝の邦訳者によって指摘されていますが、これも『赤毛のアン』を執筆し始めた時期を同エッセイで 1 年前倒しにしたことと同様、意図的な誤りであったと思われます。

第2節 三年間の幸福

ウィルへの想いで満たされた『アンの幸福』にも、シャーロット・ブロンテの『ヴァレット』へのオマージュが散りばめられています。

この作品では、アンとギルバートが婚約してから結婚するまでの3年間の、アンからギルバートへの手紙を軸に、アンが中学校の校長職に就くため赴任したサマーサイドの街で出会った人たちとの交流が描かれています。

この構図はそのまま、『ヴァレット』のラストシーンにあるのです。

『ヴァレット』の主人公ルーシー・スノウも、西インド諸島に赴いたポール・エマニュエルと3年間の文通をします。

ポールが用意してくれていたヴァレット郊外のコテージで、小さな学校を慎ましやかに開いたルーシー。

その後、ポール・エマニュエルを海難事故で失うルーシーは、

“M. Emanuel was away three years. Reader, they were the three happiest years of my life.”

(ムッシュ・エマニュエルは三年間いなかった。読者よ、それは私の人生でもっとも幸せな三年間だった。) ” 『ヴァレット』 青山誠子訳 第42章より

と述懐します。

この「ルーシーの3年間の文通」が、モンゴメリの『アンの幸福』では「アンの3年間の文通」という形でオマージュされており、またルーシーのセリフにある「もっとも幸せな三年間」が、ブロンテに造詣の深い村岡花子さんによって『アンの幸福』というタイトルになったに違いありません。

もっとも、ロマンスよりもユーモアの小悪魔が心に住み着いているとの自覚を持つモンゴメリは、『ヴァレット』ルーシーの真面目な述懐を、面白エピソードにしてしまっています。

例えば上記ルーシーのセリフは、ルーシー自身が「その矛盾した言葉」と評していますが、愛するポールがそばにいないのに幸福であるという、そのわけは次のようなものでした。

船の便があるたびに、ポールからの長文の手紙がルーシーの元へ届けられることで、「愛のエネルギーが供給」され続け、ルーシーは小さな学校の校長としてやっていくことができたのだと。

そこをモンゴメリは、次のように変換します。

「(柳風荘の持ち主である船長は) 自分じゃ家にいることは滅多になかったし、長く逗留することなんか一度もありませんでしたがね。ケイトお婆さんはその点が不満だと、いつも言い言いしたものでしたよ。けれども、私たちにゃ、船長がそんなにわずかしか家にいられないのが不満だと言っているのか、それとも帰ってくること自体が面倒だと言うのか、どうも分かりませんでしたかね。」

『アンの幸福』村岡花子訳 一年目1章より

これは、アンが下宿先を見つける際に知り合った近所のお婆さんのセリフとして置かれているのですが、そのお婆さんは次のようなことも言うのです。

「ケイトとチャティはあなたがいない間にあなたの持ち物を掻き回しなどしませんよ。たいへん良心的な人たちですからね。レベッカ・デューはやりかねないけれど、でもあなたの告げ口などしませんよ。」『アンの幸福』村岡花子訳 一年目1章より

この「あなたがいない間にあなたの持ち物を掻き回す」だの、あらぬ「告げ口」をするだのと言うのは、『ヴィレット』に登場するマダム・ベックという寄宿学校の女性校長の描写と同じであり、モンゴメリはそのような人物を揶揄しているのでしょう。

マダム・ベックは、シャーロットとエミリ・ブロンテが留学したブリュッセルの寄宿学校の校長で、エジェ教授の奥方であるエジェ夫人がモデルとされています。

シャーロットが何通か送った恋文を、返事を書かずにゴミ箱に破り捨てたエジェ教授。

そのゴミ箱から拾い上げて貼り合わせ、取っておいたエジェ夫人。

シャーロットが描写したマダム・ベックの驚きの生態も、あながち誇張されたものではないと、モンゴメリは感じたのかもしれませんが。

第3節 二人のキャサリンと「6月28日」

ところで、先ほど引用したセリフにあるケイト “Kate” とチャティ “chatty” は、柳風荘の持ち主である船長の未亡人とその妹ですが、Kate はキャサリンの、Chatty はシャーロットの愛称です。

つまり、Kate はエミリ・ブロンテが著した『嵐が丘』のヒロイン Catherine (キャサリン) に、Chatty はシャーロット・ブロンテに対応させていることがわかります。

キャサリンといえば、この『アンの幸福』にはもう一人の「キャサリン」が登場します。それはアンより少し年上の Katherine 副校長（村岡花子さん訳では「キャザリン」）。頭が良いけれど皮肉屋で、生徒を恐怖で統率する女性です。ある時アンが、

「あなたの名前が K で始まっていてよかったと思うわ。KATHERINE のほうが C で始まる CATHERINE よりもずっと魅力的よ。K という字はきざな C より、はるかにジブシー的ね」

『アンの幸福』村岡花子訳 1年目2章より

（拙注：「ジブシー的」とはロマンティックの意味。ウォルター・スコットの小説は「ジブシー小説」と呼ばれており、そこから転じた。）

と伝えると、次によこした手紙には CATHERINE BROOKE と署名してくるなど、何かと校長のアンに歯向かってきた手強い女性でしたが、やがてアンに心を開くようになり、教えるのが嫌いだったことに気づいた彼女はレドモンド大学の秘書科に入学するため中学の職を辞めて、最後には「世界一周の旅に出る議員の秘書」になります。

「世界一周家」となったキャザリンは世界を風のように飛び回るわけですが、これが『嵐が丘』で亡くなったキャサリン・アーンショーが風になってヒースの丘を飛び回っている情景と重なるのです。

アン・シリーズでは一貫してシャーロット・ブロンテとその作品から、たまにアン・ブロンテとその作品からモチーフを得ていたモンゴメリですが、エミリー・シリーズが頓挫したのちに描かれた『アンの幸福』では、このようなエミリー・ブロンテ作品へのオマージュが見られます。

さて、『アンの幸福』の最初の章で、柳風荘の家政を担うレベッカ・デューの年齢が「まだやっと四十五ですから」と書かれています。

1887年 - 45歳 = 1842年：レベッカ・デューの生まれ年

というように、これまたシャーロットの「ブリュッセル体験」に重ねられた時間軸になっていることがわかります。

ただし、ここで用いた「1887年」は第9章2節で書いた通り、本来のアン・シリーズのタイムラインである1888年から1年前倒しになっているものです。

『アンの幸福』の終わりから二つ目の章の書き出しには「六月二十七日」という日付でギルバートへのラストレターが置かれており、最終章ではその「あくる日」にアンが柳風荘を去ります。

レベッカ・デューはアンが暮らした塔の窓から大きな白い湯上りタオルを「狂気のように

に」打ち振るのですが、そうしたレベッカ・デューの「最後のメッセージ」をアンが受けたのは「六月二十七日」の「あくる日」である**6月28日**です。

父のいるプリンス・アルバートを離れることになった16歳のモンゴメリが、**愛の告白が認められた手紙をウィルからもらったのが8月26日。

「最後のメッセージ」を受け取る日付が対称的な数字で置かれている** ことがわかります。

晩年になって、アン・シリーズに埋め込まれているウィルとの思い出の時間軸を隠蔽しようと描き足された『アンの幸福』でしたが、そのお話の最後には、やはり大切な数字を埋め込んでしまっているモンゴメリなのでした。

第 11 章 最後の二作で叶えたもの

第1節 夭折した二人のブロンテ姉妹

『アンの幸福』から3年後に出版されたアン・シリーズ最後の作品“Anne of Ingleside”（邦題『炉辺荘のアン』）では、アンの末娘リラが生まれるあたりの顛末や、長男ジェムが母の誕生日に自分で稼いだお金でプレゼントを贈ろうと奮闘する様子など、炉辺荘に移り住んだアン夫妻と住み込み家政婦のスーザン、そして6人になった子供達の七年間の物語が描かれています。

七年間の主なエピソードを辿るとこうなります。

1年目：1899年7月 月末にリラが生まれ、このときジェムは7歳。

2年目：1900年4月 マライアお婆さんは55歳の誕生日に激怒して立ち去る。

3年目：1901年3月 母の誕生日に、ジェムがプレゼントを贈る。6月生まれのジェムはまだ8歳。

4年目：1902年夏 10歳になったジェムは犬のブルーノと出会うが、ブルーノは元の飼い主のところへ。

5年目：1903年春 前年に助けられたコマドリのクックロビン、花嫁を連れて戻る。

6年目：1904年夏 ジェム12歳、入試の話もすでに始まっている。

7年目：1905年7月 月末リラ6歳、1898年に拾われた猫のシュリンプも7歳になっている。

前作で1年前倒しという操作がなされたタイムラインに沿って時間は流れ、7歳、8歳、10歳、12歳の計4回ほど記述されているジェムの年齢の全てが、生まれ年を1892年として数えられています。

物語の結末でアンとギルバートは「結婚15周年」を迎えますが、本来のアン・シリーズの時間軸では二人の結婚は1891年の9月ですから、1905年の秋はまだ14周年であることは前章で書いた通りです。

さて、モンゴメリが最後に描いたアンの物語『炉辺荘のアン』でも、シャーロット・ブロンテへのオマージュが随所に見られます。

この物語にはシャーロット・ブロンテの一番上の姉、Maria Bronte（マライア・ブロンテ）と同じマライアという名の女性が登場しますが、それがアンの家庭を引っ掻き回すギルバートの父のいとこ、Mary Maria Blythe（メアリー・マライア・ブライス）です。マライアお婆さんは、マライア・ブロンテの誕生月と同じ4月生まれと設定されている一方で、シャーロットが『ジェイン・エア』で描き出したヘレン・バーンズ（マライア・ブロンテがモデルと言われている）とは「真逆」の、本当に嫌な女性として描かれており、ここでもモンゴメリお得意の反転対称がおこなわれています。

また、次男坊のウォルターにはこんなエピソードが。

アンがリラを産むとき、ギルバートが運転する車に乗せられてグレン・セント・メアリから6マイル離れたローブリッジの知り合いの医者之家に預けられたウォルターは、その家の腕白小僧達にアンが病気だと聞かされて、心配のあまり遠い道のりを徒歩で炉辺荘に戻るのです。

ウォルターが預けられた先の地名”Lowbridge”（ローブリッジ）は、シャーロット・ブロンテの『ジェイン・エア』に出てくる”Lowood”（ローウッド）女学院の“Low”と、その女学院のモデルで実在の学校である“Cowan Bridge”（カウアン・ブリッジ）の“Bridge”を合わせたネーミングでしょう。

カウアン・ブリッジは、シャーロットが姉二人に続いて入学し、すぐ後に妹エミリも入った寄宿学校です。

そこは衛生状態が悪く、マライアとエリザベスの二人の姉は栄養失調から結核になり、亡くなります。

その経緯をシャーロットは『ジェイン・エア』で、ローウッド女学院と名を変え克明に描写しました。

ウォルターが預けられたローブリッジと、カウアン・ブリッジがモデルであるローウッドは、どちらもひどい目に遭う場所として重なるのです。

若くして亡くなったウィルへの想いを、アンとギルバートの物語に編み込んだモンゴメリが、今度はそのことを隠蔽するために晩年に追加した『アンの幸福』と『炉辺荘のアン』。

そこには、共にわずか10歳前後で夭折した「エリザベス」と「マライア」というブロンテ姉妹の二人の姉が、「小さなエリザベス」（第2章3節参照）と「マライアお婆さん」という物語の重要なモチーフとして登場していることがわかります。

第2節 Lucy という名の系譜

モンゴメリの育ての母である祖母は 1836 年、12 歳の時に英国イングランドの東海岸の村 Dunwich からプリンス・エドワード島に家族と渡ってきました。

モンゴメリは新婚旅行でシャーロット・ブロンテの面影を追って、その頃まだ交通の便が甚だしく不便だったハウースの牧師館も訪れていますが、それだけでなく、この祖母の故郷も旅の最後に訪れています。

そしてその「故郷」で「1812 年」に 16 歳で亡くなったことが彫られている”Lucy Ann Woolner” という女性の墓参りをしているのです。

1812 年と言えばモンゴメリの新婚旅行からほぼ 100 年前に当たります。

また、”Lucy Ann Woolner” という名前はモンゴメリの祖母の旧姓と全く同じであり、16 歳で夭折した彼女は祖母の父の妹であったことから、祖母の Lucy という名前（その後、モンゴメリへと受け継がれる）はこの女性から受け継がれたものとモンゴメリが日記で思いを巡らせています。

実はこの「1812 年」が、最晩年に執筆された『アンの幸福』と『炉辺荘のアン』のなかで、3 回ほど暗示されています。

1 つ目は『アンの幸福』の「第二年目の 1 章」で「千八百十二年の戦争」という記述。

2 つ目は『炉辺荘のアン』の 4 章に、マライアおばさんの母の誕生年として。

これまでに述べた通り『炉辺荘のアン』は『アンの幸福』と同様、アン・シリーズの本来の時間軸よりも 1 年前倒しになっていることに注意して、マライアおばさんの母の誕生年を計算してみましょう。

アンの長男ジェムの本来の誕生年は本稿第 2 章にあるように 1893 年ですが、『炉辺荘のアン』ではそれが 1 年前倒しされた 1892 年となり、物語の冒頭でジェムは 7 歳になっているとの描写があることから、

1892 年 + 7 歳 = 1899 年から『炉辺荘のアン』はスタート

する物語ということになります。

そして、その 4 章に「(拙注: メアリー・マライアおばさんは) 二年前にお母さんを亡くしなすったでしょう……八十五でしたって」と書かれていることから、

1899年－2年－85歳＝1812年がメアリー・マライアおばさんの母の生まれ年

となることがわかります。

3つ目はリラ・ブライスの誕生にまつわる記述が、『炉辺荘のアン』8章で「この海岸地方では八十七年ぶりという寒い七月の夜」と置かれていることから、その87年前の寒い夜が

1899年－87年＝1812年

であることがわかります。

最後の二冊に隠すように置かれた「1812年」。

それは母方の祖母の旧姓と同じ名を持つ血縁女性が亡くなった年であると同時に、ブロンテ姉妹の父母が結婚した年でもありました。

その後、ブロンテ夫妻がシャーロットを始めとする6人姉弟妹を授かったことと重ねるように、アンとギルバートも長男ジェムから末娘リラまで6人の子供たちを育てます。やがて成長したブロンテ姉妹が多感な時期を迎えていた頃、そしてモンゴメリの祖母が12歳でプリンスエドワード島に渡ってきた頃、英国はハノーバー朝の黄金時代を迎えますが、「ヴィクトリア朝」（1837年～1901年）と特別に称されるこの時代が終わる頃、物語の中ではアンの末娘リラが生まれています。モンゴメリの中に溢れるこの時代への憧憬が、アン・シャーリーの物語のもう一つの源泉であるといえましょう。

モンゴメリは『アンの幸福』の執筆を始めたことを1935年の「8月12日」の日記に書いているのですが、それはブロンテ姉妹の両親が結婚した年である「1812年」の「8」と「12」に符合する日を選んだと思われます。

Monday, Aug.12, 1935

Today I began to write *Anne of Windy Willows* —wrote fifteen pages and to my relief enjoyed it. As soon as I give my characters their names they come alive for me and I am interested in their doings and sayings. “The Selected Journals of L. M. Montgomery” より抜粋

(拙訳：1935年8月12日月曜日 今日、『アンの幸福』 を書き始めた—15ページを楽しく書き綴ることができてホッとしている。登場人物たちは名前を付けた途端に生き生きと動き始め、私は彼らの話す言葉や振る舞いに引き込まれていた。)

「1812年」と同様に、『アンの幸福』と『炉辺荘のアン』にはもう一つの暗示された年代があります。

それは「1812年」の100年後である「1912年」。

『アンの幸福』の物語は「九月十二日月曜日」という日から始まっていますし、『炉辺荘のアン』の執筆が開始されたことが綴られた日記の日付は1938年の「9月12日」。

「1812年」の100年後である「1912年」の「9」と「12」に符合する日を選んで記されたと思われます。

Friday, Sept. 9, 1938

I did spade work all the forenoon on some short stories but I have decided that on Monday I will begin writing *A. of I.* “The Selected Journals of L. M. Montgomery” より抜粋
(拙訳：1938年9月9日金曜日 午前中いっぱいかけて『炉辺荘のアン』のエピソードをいくつか下書きし、来週の月曜日には執筆を始めようと決めた。)

Monday, Sept. 12, 1938

On this hot dark muggy day I sat me down and *began to write Anne of Ingleside*. It is a year and nine months since I wrote a single line of creative work. But I can still write. I wrote a chapter. A burden rolled from my spirit. And I was suddenly *back in my own world* with all my dear Avonlea and Glen folks again. I was like going home. But my eyes bothered me a good deal while writing. And Evan has a bad head again. “The Selected Journals of L. M. Montgomery” より

(拙訳：1938年9月12日月曜日 こんなどんよりとして蒸し暑い日に、私は腰を据えて『炉辺荘のアン』を書き始めた。あの1行を綴ってから1年と9ヶ月も過ぎている。でも私はまだ書ける。一章を書いた。鬱いでいた心も晴れた。気がつくとは、愛するアヴォンリーとグレンの人々のいる私の世界へと舞い戻っていた。まるで我が家に帰ったように。しかし、執筆中ずっと目の衰えに煩わされる。ユーアンも、また頭痛に悩まされている。)

振り返れば、1911年の祖母との死別とそれに続く結婚と新婚旅行という人生の一大イベントについて、その翌年1912年の1月になって初めて日記に綴っていたモンゴメリ。これらの事実から「1912年」は、「1812年」と同様モンゴメリにとってとても大切な節目であったことは間違いないでしょう。

モンゴメリが『赤毛のアン』の執筆を始めた年は1905年だったということ、1907年の「8月16日」の日記で書いたのは、シャーロット・ブロンテの生まれ年である「1816年」

の「8」と「16」に符合する日を選んだからである、と第2章1節で書きましたが、それと同様のことをアン・シリーズのラスト2作でも行なっていたのです。

第3節 早世した魂の救済

さて、これまで見てきたブロンテとの連関を簡単にまとめて見ましょう。

* 『赤毛のアン』は、シャーロット・ブロンテとその家族、そしてシャーロット作『ジェイン・エア』と『シャーリー』からのモチーフ

* 『アンの青春』はアン・ブロンテと、彼女作『アグネス・グレイ』と『ワイルドフェル・ホールの住人』、そしてシャーロット作『シャーリー』と『ヴィレット』からのモチーフ

* 『アンの愛情』はシャーロット作『ジェイン・エア』と『シャーリー』、『ヴィレット』からのモチーフ

* 『アンの夢の家』はシャーロットが袖にした3人の男性と、シャーロット作『ヴィレット』からのモチーフ

* 『虹の谷のアン』はシャーロット作『シャーリー』からのモチーフ

* 『アンの娘リラ』はシャーロット作『ヴィレット』からのモチーフ

* 『アンの幸福』はブロンテ姉妹の夭折した次女と、エミリー・ブロンテ作『嵐が丘』、シャーロット作『ヴィレット』からのモチーフ

* 『炉辺荘のアン』は、ブロンテ姉妹の夭折した長女と、シャーロット作『ジェイン・エア』からのモチーフ

『赤毛のアン』から始まるアン・シャーリーの物語は、ウィルとシャーロット・ブロンテという二人の kindred sprits への思いを散りばめながら、『アンの娘リラ』でのアンの次男ウォルターの戦死という「悲しみ」と末娘リラの結婚という「希望」で幕を閉じます。

一方、ウィルとシャーロット・ブロンテという二人の kindred sprits との関係性を示す時間軸上の手がかりを無くすために付け加えた『アンの幸福』や、それにつづく『炉辺荘のアン』でも、モンゴメリは二人の kindred sprits へのメッセージを込めながら、アンとギルバートの「結婚15周年（本当は14周年）」という区切りでアン・シリーズを締め括りました。

時間を巻き戻す形で後から追加された『アンの幸福』と『炉辺荘のアン』。

そこに、若くして亡くなったウィルと二人で叶えたかったこと、結婚して一年も経たぬうちにお腹の中の赤ちゃんと共に他界したシャーロット・ブロンテが叶えたかったであろうことを、アン・シャーリーが幸せな婚約時代を送り、やがて穏やかな家庭を築いていくかけがえのない日常として綴ることで、創作の始めに確かにあった鮮やかなイメージを今一度噛みしめていたように思われます。

最終章 モンゴメリの死と再生

第1節 ヨセフは「取り去られた者」

若くして亡くなった人の面影、遙か昔にあった王国の遺構、絶えた王家とその臣下の記章。

モンゴメリは、彼女の生きる時代の表舞台から失われたものへ思いを馳せ、それらにちなんだ事柄をアン・シリーズのなかに登場する人や土地に与えるということをよくしていることは、これまで述べてきた通りです。

このことを知った上で、モンゴメリが *kindred spirits* に新たに付けた名前、"the race that knows Joseph" (ヨセフを知っている一族) の由来を改めて考えると、彼女が *kindred spirits* をどのようなものと考えていたのかをはっきりと知ることができます。

本稿第8章4節で、ヨセフとは旧約聖書の「創世記」に登場する「主の恵みと共にいる者」であり、西欧社会では「貞節を守る」象徴として知られる人物だけれど、その人となりにも共通する者が「ヨセフを知っている一族」ということではないであろうとも書きました。

では、このヨセフのどんな側面を知っている人が *kindred spirits* なのでしょう。

Wikipedia のヨセフの項にはこう書かれています。

ヨセフ (: Joseph) の名は、ユダヤ教モーセ五書に記されたヘブライ語の名である。ユダヤ教モーセ五書におけるヨセフの名の由来は、神が初産のラケルの恥を「すすいでくださった (: has taken)」ことにあやかっただけのもの。

モンゴメリがちなんだのがこのヨセフの名の由来であったなら、「ヨセフを知っている一族」とは「**"has taken"** = 取り去られたもの」を知っている一族ということになります。

つまり、ウィルを始め夭折した人々や、ノーサンブリア王国や古メルローズ、スチュアート朝とジャコバイトはもちろん、シャーロット・ブロンテに振られて彼女の人生の舞台から除かれた3人の男性さえも、そこにいる(ある)かのような時空を超えたヴィジョンとして直感する人たちが *kindred spirits* である、そうモンゴメリは考えていたのではないのでしょうか。

第2節 DOR の物語

1942年4月24日。

モンゴメリはこの世を去りました。

1942年はシャーロットの「ブリュッセル体験」の1842年からちょうど100年後。

4月はモンゴメリが愛していた詩人ルパート・ブルックの亡くなった月であり、ギルバートのモデルであるウィルが亡くなった月です。(拙注：『アンの夢の家』の扉(トビラ)にルパート・ブルックの詩が引用されている。詳細については『もっと「アン」を描きたかったモンゴメリ』番外その2を参照。)

そして、24日は1848年9月に亡くなったパトリック・ブランウェル・ブロンテの月命日。

モンゴメリの死が病死や事故であれば、これらの符合は全て偶然のことと言えるでしょう。

でも、そうではなかったとしたら。

もし、彼女がこの日を選んだとしたら。

数字にかなりのこだわりを持って創作活動をしてきたモンゴメリは、一番のお気に入りである『アンの夢の家』は**1916年6月16日**に執筆を始めた、と日記に書いています。
(* 2021年4月3日の追記参照)

シャーロット・ブロンテの生まれた**1816**年から**100**年後の、**1**と**6**が繰り返し現れる年月日に。

では、4と2が繰り返し現れる「1942年4月24日」は？

大好きなシャーロット・ブロンテとその作品からアン・シリーズを紡ぎだし、そこに想い人ウィルとの思い出を埋め込んだモンゴメリ。

しかしその後、そのことを世間の目から隠そうとしたモンゴメリ。

最晩年は手の痛みで字が書けなくなってしまったことに加え、長男の度重なる不始末や第二次世界大戦という再びの悪夢に、日記を書く意欲さえ失って亡くなったモンゴメリ。『アンの幸福』以降の彼女には、どこことなくパトリック・ブランウェルと重なるものがあります。

幼少からブロンテ三姉妹の創作活動を導き、プロ並みの画力で彼女たちの肖像画を描いて、そこに自らの姿も描いておきながら後に塗りつぶしてしまったパトリック・ブランウェル。

想い人のロビンソン夫人に捨てられたことで創作意欲を失い、最後には酒と薬物に溺れ死んでしまったパトリック・ブランウェル。

親族には自殺と受け止められているモンゴメリの死は、その原因を特定することは永遠に出来ないでしょう。

しかし、彼女のシャーロット・ブロンテマニアぶりやアン・シリーズの時間軸の秘密など、複雑で混み入った事柄を解きほぐすことで見えてきた時間と空間、現実と空想、こちら側の世界と向こう側の世界の境を超えたモンゴメリの心象世界には、いつもウィルがいたことは間違いないように思います。

ウィルと離れ離れになったことを記したモンゴメリの日記の日付は 8 月最後の水曜日、1891 年 8 月 26 日となっています。

そして、アン・シリーズ 2 作目の『アンの青春』は、頑なに独身を貫くオールド・ミスの Miss ラヴェンダーが、思いがけず再会した 25 年前の婚約者と「八月の最後の水曜日」に結婚式を挙げるというエピソードでハッピーエンドを迎えます。

その後、30 年にわたりアンの物語を書き続けるなかで、葛藤と昇華を繰り返したモンゴメリの心は、大英勲章という栄誉に浴したことで、こちら側の世界と向こう側の世界の狭間に落ち込んでしまったよう。

そんな彼女が、夫ユーアンの心の病の悪化や長男の度重なる不祥事、再びの世界戦争、自身の老化という暗く重い耳鳴りの中に閉じ込められていく中で、“for two” という穏やかなりフレイスが誘う向こう側の世界へと旅立ったとしても不思議ではありません。

(※ 2021 年 4 月 3 日追記：正確には、1916 年 6 月 17 日のモンゴメリの日記に、「昨日『アンの夢の家』を描き始めた。」との記述あり。

それはモンゴメリの癖で、大切な日付はストレートに書き記さず、常に暗示にとどめている。

『アンの幸福』でも、最終章の日付が明記されておらず、その代わりに一つ前の章に記された「六月二十七日」の「あくる日」となっていたことは第 10 章で述べた通り。

レベッカ・デューのラストメッセージをアンが目にしたのは 6 月 28 日でしたが、ウィルから愛の告白メッセージをもらった 8 月 26 日と対称的に置かれた数字になっている。)

ここまで読んでくださったあなたは、モンゴメリの泥沼話だと思われたでしょうか。

私はこの本の序章のタイトルを～ようこそドロの世界へ～としましたが、そのドロは泥ではありません。

モンゴメリはスコットランド地方の方言である“doric”（ドーリック）の響きが好きだと文通相手に書き送っています。

“Druid”（ドルイド）や“Dryad”（ドライアド）、“dream”（ドリーム）と同様、“doric”も DO と R の音を持ちますが、それらは全て“tree”（木）や“wood”（森）を意味する“deru-”を語源に持つ言葉です。

第6章でも触れたトーリー党の”Tory”（トーリー）も”deru-”から派生したワードであり「木」を意味することは、トーリー党の紋章に一本の木が描かれていることから分かります。

モンゴメリやブロンテ姉妹が描き出した”kindred”（キンドレッド）という言葉にも**DOR**の音が含まれており、木を神聖視したケルトの人々の感性から生まれたワードではないかと思われま

本稿の序章にある「ドゥリィー（dree: 退屈）」で「ドゥリィアリィ（dreary: うら寂しい）」という言葉にも、DOとRの音があります。

ブロンテ姉妹が彼女たちの小説で繰り返し用いたそれらワードの、「退屈」とか「うら寂しい」という訳は現代語としては正しいのです。

しかし少なくとも”dree”に関しては、スコットランドの古語で「(悲しみなどに) 耐える」という意味であったことがわかっています。

歴史的勝者であるイングランドの言葉となった時に、本来の意味が変わってしまったのでしょう。

かつて文通相手のマクミランに、

「わたしは《恋人の小径》を通り抜けました—娘らしい愛らしさをたたえた、六月の《恋人の小径》ではなく、つらい涙を流しては齡を重ね、賞賛という衣をまとうように悲しみで全身をおおった婦人の美しさを持つ《恋人の小径》を。」『モンゴメリ書簡集 I G.B. マクミランへの手紙』ポールジャー、エパリー編 宮武潤三、宮武順子共訳 篠崎書林
1904年11月9日の手紙より抜粋

と綴っていたモンゴメリにとって、“dree”というDOとRからなる言葉にマイナスイメージはなかったことが推察されます。

シャーロットの『ヴィレット』に描かれた、なんでも上手にこなす理想的な美少女ポリーに自分を重ねていた若き日のモンゴメリ。

そんな彼女が実はやっぱり、世知辛い世の中で孤立感を覚えそこから飛翔しようとした主人公ルーシー・スノウであったことを人生の最後で実感した末の旅立ちであったとしたら。

シャーロットにとってのキンドレッドはエジェ教授であり、彼こそが「失われた王国」だったのですが、その関係性にモンゴメリが憧れていたことに、晩年ようやく気づいたのかもしれない。

そして、モンゴメリの「木を愛したケルト的感性」の詳細を記すという意味で、本稿の序章のタイトルを「ドロ（DOR）の世界」とした次第です。

私たちにアン・シリーズという喜びの風景を残したモンゴメリ。

そのヴィジョンの中に密かに埋め込まれ後に隠蔽されたウィルとの思い出の時間軸や、シャーロットを始めとするブロンテ姉妹への心の絆を知ること、モンゴメリの魂は自由になる、そう信じて筆を置きたいと思います。

補章 その1

アヴォンリーは創造的アナグラム

「アヴォンリーはたまらなく、いい名前ですもの、音楽みたいな響きをするわ。」
『赤毛のアン』村岡花子訳 5章より

本稿第4章2節で、アヴォンリー“Avonlea”はシェイクスピアの生誕地ストラットフォード・アボン・エイヴォン“Avon”からではなく、“Abbey”（修道院）や“Abbot”（大修道院長）の”Ab”の音からネーミングされた可能性について触れました。

確かにエイヴォン“Avon”の綴りはアヴォンリー“Avonlea”の語頭と同じであり、モンゴメリがシェイクスピアに因んだという解釈が定説となるのも不思議ではありませんが、モンゴメリはスペルよりも音に重きを置いた人。（詳細は第4章2節を参照。）

「エイヴォンリー」ではなく「アヴォンリー（またはアボンリー）」と発音されているAvonleaが、エイヴォンを直接の由来と考えるのはやはり不自然に思われます。

例えば、アーサー王伝説の島“Avalon”（アヴァロン）が、モンゴメリの想像の世界の原型のひとつとなっていたのかもしれませんが。

Avalonのアナグラム”Avonla”の”la”を詩語”lea”に置き換えることで、Avonleaという言葉が出来上がります。

これ以上に自然な繋がりを感じるのは、シャーロット・ブロンテの『ジェイン・エア』に出てくるキーワードのひとつ、英国の古名”Albion”（アルビオン）が、アナグラムにすると”Abonli”となり「アボンリー」と読めることです。

モンゴメリの愛読書の一つにブルワー・リットンが著した『ザノーニ』という不死の男が活躍する冒険奇譚があり、彼女は日記や手紙にこの物語からの不思議な言葉、「若きカルデア人」をたびたび引用しています。

このカルデア人たちが居た古代メソポタミア文明の公用語であるシュメール語で、“ab”は「水」を意味しているとウィキペディアにあります。

一方、“Abonli”の語尾の”li”は「草原」の意味を持つ詩語”lea”に置きかえることができます。

ab と li から ab on lea 「草原の上の水」、つまり草原を流れる川の情景を想像したモンゴメリが英国の古名 "Albion" から生み出したアナグラム "Abonli" が Avonlea の由来のひとつと考えられます。

草原を流れる川のイメージはスコットランドのボーダーズ地方を流れるツイード川の風景と重なり、その流域の古メルローズ修道院の建っていた場所の地形と、モンゴメリが「両側に水をひかえている」と描写したアヴォンリーのそれと同じである（詳細は第4章1節参照）ことから、この可能性は高いと言えるでしょう。

このように、アヴォンリーという地名は何かひとつのことに由来するのではなく、英国の歴史や文学に造詣の深かったモンゴメリが、その独特の詩的感性で音楽のような響きの Avonlea（アヴォンリー）を紡ぎ出したと考えられるのです。

ところで、「メソポタミア」はギリシア語で「川の間地」という意味のこと。

古メルローズ修道院の建っていた場所が、「両側に水をひかえている」アヴォンリーの元型であるとするならば、モンゴメリは古メルローズのケルト修道院は創建当時の人々にとってメソポタミアの再現として形作られた、とイメージしていたのかもしれませんが。

これについてはまた別の機会にお話できればと思います。

補章 その2

アン・ブロンテの没年齢

MEMORY OF ANNE BRONTE

YOUNGEST DAUGHTER OF THE REV. P. BRONTE, A. B.

SHE DIED, AGED 27 YEARS, MAY 28TH, 1849,

エリザベス・ギヤスケル著『シャーロット・ブロンテの生涯』より

これは、エリザベス・ギヤスケルが『シャーロット・ブロンテの生涯』で紹介している
ハワース教会にある銘板の碑銘の写しです。

これによると、アン・ブロンテの享年は「27歳 “AGED 27 YEARS”」であることがわか
ります。

一方、アン・ブロンテが死に際して訪れた海辺の町スカーバラにある、彼女の遺骸が葬
られた墓には、“She died Aged 28 MAY 28th 1849”と墓石に彫られていることがウィキ
ペディアの写真からわかります。

アン・ブロンテが亡くなって3年後に墓詣りに訪れたシャーロットが、そこに彫られた
事柄に五ヶ所の誤りがあることに気づき「磨きなおして文字を入れなおす」「手配をし
ただのようですが、享年については「28歳 “Aged 28”」と表記されたままであることか
ら、2011年にブロンテ協会がアンの墓碑の横に、

“The text contains one error”

“Anne Bronte was aged 29 when she died”

(拙訳：表記には一箇所誤りがあります

アン・ブロンテは29歳で亡くなりました。)

と説明する銘板を新たに設置したことが、写真付きで紹介されています。

この訂正銘板にあるように、ブロンテ協会はアン・ブロンテの享年を29歳としているの
です。

ハワース教会にある碑銘に刻まれた AGED 27 YEARS

スカーバラの墓碑に刻まれた Aged 28

ブロンテ協会の銘板にある aged 29

いったいどれが本当のアン・ブロンテの享年なのでしょう。

彼女の享年の謎を解くヒントは、ハワース教会にあるブロンテ家の壁銘板にあります。

ハワースの教会には、亡くなった順に母マリア（またはマライア）、長女マリア（マライア）、次女エリザベス、長男ブランウェル、四女エミリー、末娘アンまでの碑銘で一杯になった一つ目と、その下に置かれたシャーロットの埋葬の時に新たに造られたものの二つの壁銘板が納められているそうです。

残念なことに、いずれの銘板も風化してしまって現在では判読できないようですが、その写しを記録したギヤスケル夫人の『シャーロット・ブロンテの生涯』から碑銘を確認すると、

マリア（母）

DEPARTED TO THE SAVIOUR, SEPT. 15TH, 1821, IN THE 39TH YEAR OF HER AGE.

マリア（長姉）

SHE DIED IN THE 6TH OF MAY, 1825, IN THE 12TH YEAR OF HER AGE.

エリザベス（次姉）

WHO DIED JUNE 15TH, 1825, IN THE 11TH YEAR OF HER AGE.

ブランウェル（弟）

WHO DIED SEPT. 24TH, 1848, AGED 30 YEARS.

エミリー（長妹）

WHO DIED DEC. 19TH, 1848, AGED 29 YEARS.

アン（次妹）

SHE DIED, AGED 27 YEARS, MAY 28TH, 1849,

シャーロット

SHE DIED MARCH 31ST, 1855, IN THE 39TH YEAR OF HER AGE.

となっています。

ここには 二つの特徴的な事柄が見て取れます。

一つ目は、母からエリザベスまでと、シャーロットの享年は "IN THE ○○ TH YEAR OF HER AGE" となっている一方で、ブランウェルからアンまでのそれは "AGED ○ ○ YEARS" となっていること。

二つ目は、生年と没年から計算される「満年齢」と比べると、"IN THE ○○ TH YEAR OF HER AGE" と書かれている場合は「一つ上の歳」となっている一方で、"AGED ○ ○ YEARS" と書かれている場合は「一つ下の歳」となっていることです。

ブロンテ一家の家族それぞれの生まれた年と死亡時の満年齢は、後世の研究から次のように判明しています。

マリア（母） 1783年4月15日～1821年9月15日 38歳5ヶ月
マリア（長姉） 1814年4月（洗礼日は4月23日）～1825年5月6日 11歳を過ぎたばかり
エリザベス（次姉） 1815年2月8日～1825年6月15日 10歳4ヶ月
ブランウェル（長兄） 1817年6月26日～1848年9月24日 31歳3ヶ月
エミリー（長妹） 1818年7月30日～1848年12月19日 30歳4ヶ月
アン（次妹） 1820年1月17日～1849年5月28日 「29歳4ヶ月」
シャーロット 1816年4月21日～1855年3月31日 38歳11ヶ月

スカーバラのアン・ブロンテの墓碑には “She died Aged 28 MAY 28th 1849” とあります。

スカーバラのアンの墓碑にある享年も “Aged 28 ” と書かれていることから、1848年から1849年の間は何らかの理由で満年齢より一つ下の歳を “Aged ○○ (YEARS)” と記銘する様式があったと考えられます。

この時期はシャーロットが32歳から33歳の間にあたり、彼女が亡くなって以降の碑銘は “IN THE ○○ TH YEAR OF HER AGE “に反っているのも、もしかするとシャーロットがこの特徴的な様式での記銘を弟妹のために望んだのかもしれませんが。ここで、二つの墓碑に刻まれたアン・ブロンテの享年を満年齢に置き換えてみましょう。

ハワース教会にある碑に刻まれた “AGED 27 YEARS” は、満28歳
スカーバラの墓碑に刻まれた “Aged 28 “は、満29歳

このことから、ブロンテ協会が2011年に作った銘板にある “aged 29” は、スカーバラの墓銘を根拠にした満29歳であることが伺われます。

しかしそうすると、“The text contains one error 「表記には一箇所誤りがあります」 ” の意味がわからなくなります。

墓碑に刻まれた享年を「誤り」としながら、それが正しい場合の満年齢で訂正していることになるからです。

もし、墓碑に刻まれた “Aged 28” が間違いで、満29歳をそのまま “Aged 29” と記すことが正しいとするなら、ハワース教会の碑銘に刻まれたブランウェルとエミリーそれぞれの享年も満年齢をそのまま記していないので間違いである、ということになります。

こうしてみると、アン・ブロンテが亡くなって3年後にスカーバラを墓詣りに訪れたシャーロットが、そこに彫られた事柄にいくつかの誤りがあることに気づき訂正させた箇所の中に 「28」 という数字が含まれていたのかが気になります。

28 は訂正された後のものなのか。

28 は訂正される必要がないものなのか。

28 は訂正されるべきであったのに、訂正から漏れたものなのか。

シャーロットは、満年齢より一つ少なく記す "Aged ○○" という様式を採用しているので、28 が訂正された後のものか、訂正される必要がないもののどちらにしても、満 29 歳で亡くなったこととなりますが、訂正されるべきであったのに訂正から漏れたとすれば、本来は "aged 27" と刻まれるはずだったのかもしれない。

満年齢よりも一歳若く記銘する様式に馴染みのないスカーバラの墓石職人が、「シャーロットさんから『満 28 歳で亡くなったのだから "Aged 27" に直しておいて』と頼まれたけど、満年齢に一つ加えた歳が享年のはずだから『29 に直せ』の指示間違いじゃないだろうか。でも、"in the 29th year of her age" という様式に直せとは言われなかったし、"Aged ○○" と書くのは満年齢の時なんだろうから、亡くなった時に満 28 歳だったら 28 のままで良いんじゃないか。」と考え、訂正から漏れた可能性は否定できません。

その場合、シャーロットが考えていたアンの死亡時の満年齢は 28 歳なので、(亡くなった年 1849 年から 28 を引くと) 誕生年は 1821 年ということになります。

これは、ハウースの彼女の碑銘から考えた満年齢や誕生年と同じです。

現在アン・ブロンテの生年は 1820 年であり、満 29 歳で亡くなったというのが定説となっていますが、それではハウース教会の碑銘が誤りということになります。

1820 年説がとられるのは、ブロンテー家が 1820 年 4 月にハウースに引っ越してくる前に子供たちは 6 人全て生まれていたという父親や村人たちの証言があるのと、アンは 1 月 17 日生まれである一方で、癌を患っていた母マリアが 1821 年 1 月に危篤となり 9 月に亡くなっていることから、危篤の母からアンが生まれるのは不自然 ということのようです。

補章 その3

ネルソンとマクニール、そして「マリラ」

よく知られているように、ブロンテ姉妹の父パトリックは、もともとはブロンテという姓ではありませんでした。

パトリックがケンブリッジ大学の学生だった当時、1802年に Brunty (あるいは Bruntee) から Bronte に改姓したことがわかっています。

その三年前にイギリス海軍提督ホレーショ・ネルソン "Horatio Nelson" が、ナイルの海戦の勝利を祝してナポリ王国・シチリア王国から「ブロンテ公爵」という爵位を授けられたことにちなんだ改姓でした。

ネルソン提督は当時、“most famous Briton in the world (世界一有名なブリトン人)” と呼ばれていた人物です。

シャーロット・ブロンテが『ヴィレット』の冒頭で、自らを投影した主人公ルーシー・スノウの育ての親であり「名付け親」でもあるルイーザ・ブレトン "Louisa Bretton" 夫人を "Bretton of Bretton (ブレトンの中のブレトン)" と紹介しているのは、こうした背景があるからでしょう。

自分たち **Bronte** 家の「名付け親」は、“**Breton of Breton**” のブロンテ公爵ネルソンなのだという強烈な自負心の現れが、物語の始まりをそう置かせたのではないのでしょうか。

そんなシャーロットが育ったブロンテ家の出自を辿ると、コーンウォール出身の母はケルト系のブリトン人であることが推察されますが、アイルランド北部出身の父は果たして、アイルランドからスコットランドに進出したゲール人 (=スコット人) と同じであるのか、逆にアイルランドに入植したブリトン人であるのかがわかりません。

しかし父パトリックの出自に関しては、モンゴメリとのひとかたならぬ因縁があることがわかりました。

これからのお話の前提として、まずスコットランド人についての説明から始めましょう。紀元 500 年頃、スコットランドのキンタイア半島にアイルランドのスコット人 (拙注: スコットはゲールのラテン語名。ブリテン島北部に先住していたピクト人も近年ではゲール人とみなされており、アーガイル地方に遅れてやってきた民を呼ぶ際には本稿ではスコット人としています。) ファーガス・モー・マク・エルクが上陸、ダルリアダ王国を建国。

9世紀にダルリアダ王ケネス1世がピクト人の王国アルバ“Alba”の王となりますが、このことからケネス1世はスコットランド王朝の始祖と位置付けられており、また現在でもスコットランドはゲール語でAlbaと表記されていることは第5章に書いた通りです。14世紀に独立を宣言するまでのスコットランドは、自分たちをアイルランド人であると信じるスコット人の王が支配する地域でした。

(参考図書『ケルト歴史地図』p. 104「スコット人の王国」ジョン・ヘイウッド著 井村君江監訳 2003年 東京書籍)

「アルバ王国 (Kingdom Alba) の起源」については中世に、次の三通りの説がありました。(英語版ウィキペディア”Origins of the Kingdom of Alba”より)

https://en.wikipedia.org/wiki/Origins_of_the_Kingdom_of_Alba

- 1) ウォルター・バウアー (1385～) 説：中世スコットランドの言い伝えによれば Scots は、エジプトのファラオ (王) の末裔であり伝説の王女 Scota から名付けられた。Scota はイベリア半島からアイルランドを経てスコットランドへ来たとされる。
- 2) 980年のスコットランドの聖人の説：Gaels が度重なるピクト人との戦いに勝ち、アイルランドを制圧。その後 Britain を侵略し、Iona (アイオナ) を手に入れる。彼らのコマンダー (司令官) は Spartan (スパルタ人) の Nel (= Niall) であり、彼の妻 Scota にちなんでスコット人、スコットランドと名付けられた。
- 3) アイルランドの詩 Duan Eireannach の記述：Scythia (スキタイ) → Egypt (エジプト) → Ireland (アイルランド) と渡ってきた。

第4章で紹介した The Declaration of Arbroath (アープロース独立宣言) の全文を読むと、そこにはこの三つの説が垣間見られます。

独立宣言には、スコットランド人は元々スキタイ王国にいた人々がスペインを經由してブリテンに移住したとあり、その時期はイスラエルの民が紅海を渡ってから (拙注1) 1200年後 (拙注2) であること、またスコットランド人がいかにしてブリトン人を追い払い、ピクト人を滅ぼし、また北方民族やデー人、そしてイングランド人の侵略からその国土を守ってきたかが叙述されていますが、アイルランドからの出自だけはそれが当たり前のことであった為か省略されています。

(拙注1：モーセの海が割れるエピソードを指す。紀元前1250年頃のこと)

(拙注2：1250 - 1200 = 50 紀元前50年頃)

さて、これまでの章で何度か登場した「アナグラム」という言葉は、英単語のアルファベットの位置を自由に移動させて、別の単語に変化させる遊びのことです。

ブロンテという名前が、ギリシャ語で「雷」を意味することはつとに知られていますが、

ブロンテ”Bronte “という名前が、ケルト系英国人を意味するブレトン”Breton “のアナグラムになっている

ことはこれまた当たり前すぎる為か、あまり指摘されていないようです。

ネルソン提督が授与されたブロンテという爵位に、そんなアナグラムが込められていたのかどうかはわかりませんが、ネルソンが”Briton of Briton”と呼ばれていたことと全く関係がないとも思われません。

Briton は Breton と同じくケルト系英国人であり、英国（ウェールズやコーンウォールなど）にいる場合は Briton、大陸のアルモリカにいる場合は Breton という表記になります。

そしてここからが当項の本題です。

第5章でも書いたように、モンゴメリの育ての親である母方の祖父の家系は、スコットランド氏族の族長 Macneill（マクニール）といいます。

マクニール家は、スコットランドの西岸に広がるアウターヘブリディーズ諸島南部を領有していたそうです（ウィキペディア「スコットランドの氏族」の氏族分布地図を参照）が、元を辿れば5世紀にアイルランドを治めていた上王（high king）の系譜に連なる氏族なのだとか。

さて、『スコットランド国民の歴史』という本の14章には次のような記述があります。

「ヘブリース諸島南部（拙注：アウターヘブリディーズ諸島に属し、アーガイル地方の北に位置する）のマクニール氏族の族長は領地内の小作人の結婚をやもめも男やもめも含めてすべて取り仕切っていた【中略】族長は新郎新婦の家父長としての責任を引き受けたことにもなる。マクニール氏族は、厳冬期に乳牛を亡くした小作人に代わりの牛を与えたり、高齢になったり、身体が弱くなったりして農作業に耐えられない者たちを客人として自宅に引き取り、生涯養ったりもした。」『スコットランド国民の歴史』p. 331

T.C. スマウト著 木村正俊監訳 原書房 2010年

どうやらモンゴメリの母方のご先祖様は縁組が得意な世話好きだったようですが、モンゴメリもアン・シリーズの中でアンに周囲の問題を抱えたカップルを次々とゴールインさせていたのは、このような血統のなせるわざなのかもしれません。

そして、マク “Mac” は息子の意なのでマクニール “Macneil” は「ニールの息子」という意味になりますが、この「ニール “neill”」は前述の「アルバ王国の起源」でご紹介した司令官ニール “Niall” と同じ発音であることから、Britain に侵入して Iona（アイオナ）を手に入れたスパルタ人のコマンダーの子孫という意味になります。

一方のブロンテ家が敬愛したネルソン提督の名前も、ソン “son” は息子の意なので、ネ

ルソン “Nelson” も「ネル “Nel” の息子」ということになります。

前述した「アルバ王国の起源」にもある通り「Nel=Niall」なので、ネルソンの称号にちなんでブロンテと名乗ることになったブロンテ家と、モンゴメリの母方の祖父が連なるマクニール家は、姓名的には「スパルタ人ネル（ニール）の子孫」という共通項があったのです。

モンゴメリのケルト世界の泥沼にここまで踏み入ったついでにもうひと深み、とっておきのアナグラムをご紹介しますこの項を終わりたいと思います。

第4章でご紹介した「アルモリカ」と同意のウェールズ語 “Ar Y Mor（海に開けた場所）”。

そのアナグラム “MAryro” は、マリラと読めないでしょうか？

母のなかったアンの、新しい母となるマリラと重なるイメージが広がります。

母国となったアルモリカから旅立って、スコットランドでスチュアート朝を築いた Breton（ブレトン人）の “House of Stuart”（スチュアート王家）。

その王家を代々支持したモンゴメリの母方のスコットランド氏族マクニール家は、“Anne of Great Britain”（アン女王）が崩御してスチュアート朝が断絶した母国から、プリンス・エドワード島へと渡りました。

母を失っても新たな母マリラと出会った “Anne of Green Gables” と、母国に似た「海に開けた場所」で力強く生きてきたモンゴメリの祖先たちとが重なります。

「マリラ」というネーミングには、第1章でご紹介した通り「私のライラック（思い出）」というニュアンスが込められている訳ですが、補章その1でも書いたようにメソポタミア文明にもちょっとした思い入れのあるモンゴメリの思考の中では、メソポタミア神話に登場するミルラ “Myrrh” という処女母 “Virgin mother” の像が、マリラの造形の下地としてあったように思われます。

「母なる海」ミルラから形作られたであろうマリラという名前は、アン・シャーリーの新たな母であることを暗示する、至高のネーミングであったことは確かでしょう。

～なんとも沼深い『赤毛のアン ヨセフの真実』に、おつきあいいただきありがとうございました。

本稿は2010年に執筆した『真実の赤毛のアン』を基にして、新たに見つけたことからまとめたものです。

参考文献はウィキペディアを含め出来るだけ記載しておりますが、明記されていない部分は『真実の赤毛のアン』の「参考と引用」ページに準じたものとなっております。

なお、パブサイト等の『ブロンテになりたかったモンゴメリ』は、『真実の赤毛のアン』を2012年に書き改めたヴァージョンアップ版です。

そちらもどうぞよろしく願いたします。～

♪拙記事のアイデアを参考にされる場合は、参照元のご明記を・・・♪

赤毛のアン ヨセフの真実

著 nobvko

制作 Puboo
発行所 デザインエッグ株式会社
